

---

# とある恋姫の暴走人影（シャドウランナウェー）

ノベルプロジェクト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある恋姫の暴走人影<sup>シャドウランナウエー</sup>

### 【Nコード】

N4613X

### 【作者名】

ノベルプロジェクト

### 【あらすじ】

御神リヨーマの物語『とある魔術の暴走人影』の続編。少年・御神リヨーマは不運にも現実世界から恋姫の世界に迷いこん……否、強制的に連れてこられ、そこであった少女達と共に力を合わせ霸道の手伝いをする……時には少女達にイジられ、時にはおふざけを、時にはフラグを立て、時にはえっちいことを……いや、御神には恋人がいるから、乱立するフラグを叩き折ろうとするが……人は浮気をする生き物よん by 筋肉達磨の片方の名言により暴走するかもしれないのは無きにしも非ず

00・緊急事態です！～ A new story begins ～ (前書)

注意

この作品のおふぞけ指数は60%を超えています

## 00・緊急事態でございます〜 A new story begins〜

『エマーゼンシー緊急事態ツ！エマーゼンシー緊急事態ツ！とある外史にて、アレン＝マクダエルが暴走ツ！各「外史」及び、各「界」に歪み亀裂等が発生ツ！』

ここは天界と呼ばれる界のとある特別本部（仮）にて……

けたたましく鳴り響く警報。

慌ただしく動き回る職員達。

ダン！と、誰かがテーブルを力強く叩いた。

その音源に職員達の視線が集まる。

「ええい！討伐隊は一体何をしている！？」

声を荒げる男はこの特別本部の全責任を任された館長（仮）。

その男はモニターに映し出された『緊急事態』の文字を睨みつけながら叫び、テーブルを叩いたのであった。

テーブルには精密機器？がゴチャゴチャと取り付けていて、殴ったら痛いから普通は遠慮するのだが、そんなものはお構い無し。多少の痛みより今この状況の方が痛手であったのだから。

その男の荒げた声に返答した、ここでは職員Aと呼ぼうか……

まあ、その職員Aはこちらもテーブルに備わったキーボード？みたいな精密機器を尋常じゃない速度で叩き打ち込みながら返答した。「応答がありません！恐らくアイツによって全滅させられたのかと…… 思います」

最後の方は自信がなかったのか、声がどもって聞こえづらかった。だが、大体言いたいことはわかった。

だから、館長は叫んだ。

「バカな！？討伐に向かわせたのは精鋭部隊だぞ！奴は聖人でも影を操ることもできない、ただの魔術師に成り下がった屑だ！？こちらが負けるはずがない！！」

「ですが、応答がありません。全滅させられたのは確かかと……

……」  
最後まで言えないのはやはり自信がないからか。それとも、館長の顔を疑っているかは、本人にしか分からないが……それはさて置き、

「バカな……ありえん。本当にありえんぞ……そ、そんな事があつてたまるものか！」

職員Aの、その返答に驚愕の色を隠せない館長は齒噛みした。眉間にシワが寄り、こめかみには青筋が……

は、般若だ。

そう思った職員Aは恐る恐る尋ねた。

「……どうしますか？」

目が合った。

睨まれるかと思った。

しかし、館長は意外と冷静に、落ち着きを取り戻し自分の席へと戻る。

本来の所定の最高責任者の座席ボジションへと。

アイツのせいで動揺が隠せなくウロウロ、いやオロオロと歩くのは止めたようだが……

「もうこれ以上、我々が世界に干渉することはあまりに良くない。

先の討伐隊だけでも、歪みの懸念は払拭できぬ」

「ですが、アイツをこのまま好き放題させるおつもりですか！」

「分かっている！少し黙ってくれ………神め、とんでもないバケモノを生み出してくれたものだ」

髪をグチャグチャに掻き乱した館長は、ここにはいない人物？の悪態を吐いた。

この場でその発言を咎める者は誰もいない。

皆、同じことを思っているのだから……神が悪いのだと。

まあ、それもさて置き……

アイツ……アレニマクダエルという人物の危険度は、この天界の中でもワースト3に選ばれた超が付くほどの有名人だ。

そんなアイツがとある世界……とある外史で暴れている。だから、討伐隊を向かわした。精鋭の中からさらに選んだ超エリート集団を送り込んだ。だが、討伐完了の報告の代わりにこの警報。その外史で何が起きたのか、一目瞭然だった。

ポポポポ〜ン

静寂する職場にて、けたたましい？電子音が鳴った。

討伐隊に持たせた通信機から受信されたものだった。

職員Aとは別の職員Bがその電子音にいち早く反応し、

「か、館長！通信です！つ、繋がりますか？」

「生存者か！？よし、繋げ！」

すぐさま館長も対応したが……生存者？

そんなワケがない。

ここは無視すべきだったと後悔することになった一同。

『ハロハロー。派手な挨拶ご苦労だったねえ。天界の諸君』

この、ふざけた口調に独特の人に嫌悪感を与える拒絶したくなる

喋り方は、間違いなくアイツだ。

やはりか、と思う者が大半だった。

誰もが、あわよくば討伐隊の誰かだと小さな希望に縋ってなどいなかった。

そう思ったのは館長だけなのだろう。

「……………アレン＝マクダエル」

忌々しそくに吐き捨てる。

そして、モニターには『緊急事態』の文字から、アイツとその周辺映像に切り替えられた。

「……………くそ。なんてことを」

討伐隊は全滅していた。

無残にも肉塊と化したソレと、その中心に立つアイツ。

よく見てみると戦闘を行ったはずのアイツは無傷だった。さらに、血を一滴たりとも、かかっていたいなかった。

息一つ乱していないアイツは落ちてる肉塊をかじったり舐めたりと……その映像を見た何人かの職員は小さな悲鳴を上げた者もいた。口を押さえ吐き気を我慢する者もいた。

しかし、アイツにはこちらの様子は分からない。

ただ、雰囲気は伝わったと思うが、そんなことは知ったことじゃない、と言つかのように明るく、

『ノンノン！今はもうその名前じゃないんだよ。ちゃんと、呼んでよ。僕の名を……いや、なんだったら真名でも良いよ。』

などと、笑っている。

俺、もう無理です。と退席する者が出たが、その者には目も暮れず、館長はモニターを睨みつけたままだった。

『僕を止めたければ、御神リョーマ君をこちらの世界に連れて来いよ。』

これだけで十分だった。

アイツが何を企んでるのか、分かったから。

もう会話はしたくない。

アイツと会話するだけで吐き気がする。

本当にくだらない。その一言に尽きるが……しかし敢えて聞く。

「何を企んでいる？」

『なに、彼にリベンジを申し込もうかと思ってね。』

アイツの狙いは、ただソレだけだった。

だからこそ。憤りを覚えた。

個人的な理由で、こんなくだらない理由で、全『世界』の全『生命』を危険に脅かすのかと。

「……で、できない。その要求は飲めない……そんなことをすれば、余計に世界が歪み亀裂が入る！」

『もう、十分に歪んでるんでしょ？僕がナニもしなくても、実は……  
……だったら今更ちよつとした歪みなんて気にしなくていいでしょ……  
……まあ、君達は世界に入る亀裂云々より自分達の界に亀裂が入ること  
とを恐れているのだからうけどさ……そんな事、知ったことか』

「……………」

『なるべく早くしてね。じゃないと、この世界を侵すぞ、コラ』

聖人じゃないから大丈夫。

悪魔の力を行使できないから心配ない。

そういう風に、たかが一介の魔術師と見ていたら足元をすくわれる。

アイツの辞書に不可能という文字はない。

だから、アイツなら本当にやりかねない。

いや、やりかねないじゃなく、やってしまっただろう。

神が生んだ最悪のバケモノは、その知識と恵まれた才を発揮し、  
その外史を侵食することも可能だ。

最早、館長に選択の余地はなかった。

「……………」わかった。御神リョーマを投入しよう」

「か、館長っ！正気ですか!？」

観念した館長に、職員Aだけじゃなく職員B、職員C達が驚きの  
声を上げる。

「黙れっ！うるさいっ！貴様らに判断できるのか!?!こ、この責任  
は全て私一人のものとする。いいな!！」

「か、館長……あなたっってお方は」

『ひゆう ちよつと見直した。いや、惚れ直したぜ。館長』

「くそっ……………」やむを得なした。例のアレを……………」

「……………」はい」

指示を出された職員Aは、急いで引き出しから何かを取り出し、  
館長に渡した。

『例のアレって?』

「……………」異次元転送装置だよ。くそったれ」



館長の手のひらにちょこんと乗った箱型のボタン。

ボタン部分と箱の四面にはドクロマークが嫌というほどに主張されていたりして、取り扱いには細心の注意を払い、館長は『異次元転送装置』を例の少年に標準を合わせた。

「……少年よ。この悪は止まらない。だから、もう一度叩いてやってくれ。頼んだぞ………」

『アハハ。カモーン！御神リョーマ君』

そんな異次元転送装置があるくらいなのだから、アイツを倒す装置や武器とかあってもいいだろうと思うのところが……まあ、そこは暗黙の了解だ。

全てを少年に託し、館長は深呼吸をして、ボタンを押した。

「…………ポチツとな」

割と軽い掛け声と共に……

ここは総人口は二三〇万人弱の八割は学生である学園都市。  
東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら東京都の中央三分の一を円形に占めている。

現場はその学園都市の第七学区。

絶対安静であるはずのとある少年が、病室から抜け出した事から始まった大騒動にまで発展した追いかけてこも、夕方の六時を回ろうとしていた。

とあるビリビリ少女の、

「じゃ、そういう事で罰ゲーム始めるわよ！」

という発言が今回のこの騒動の発端であつた。

まさかここまで大事になるとは……街の治安を守る『ジャッジメント風紀委員』  
や『アンチスキル警備員』を出動させるほどの騒動に発展させるまでに至り、かれこれ八時間以上続いていたりする。

そもそも、あの少年が逃げなければこんな事にならなかつたのだが、そこは文句言つても仕方がない。

一向に止まろうとしない、目の前を走る少年に悪態を吐き、また止めにかかるビリビリ少女。

「アンタ、重傷者でしょ！これ以上走つたら本当に死ぬわよ！」

「じゃあ、そんな重傷者に『レベルガン超電磁砲』を撃つてくるなよ！」

「それはアンタが止まらないからよ！」

「いや、止まらないのはお前が撃つてくるからだぞ？」

「いや、撃つ前から止まらなかつたじゃん！つて、あーもう！じゃあ、もう撃たないから止まりなさいよ！」

「とか言いつつ、止まった瞬間にゼロ距離ショットをお見舞いするつもりなんだろ？そうはいかないぞ！」

「ええい！だから、もう撃たないって言つてんでしようが！私つてそんなに信用ないわけ？」

「おう！」

「元気良く返事してんじゃないわよ！」

とまあ、こんな感じで二人は仲良く？追いかけてこを続けたりす

る。

もう勘弁してくれ、と後方で弱音を上げる風紀委員や警備員の人達。

たった一人、一般人を捕獲することすらできず、彼らのプライドはズタズタだったりして、諦める者もチラホラと…… オツorzです。

少年は自身の力、影を身に纏い、常人ではどう足掻いても到達できない跳躍を見せつけ、行方を眩ました。

といつても、この街のあらゆる場所に設置された監視カメラに引っ掛かり、逃れるのも数十分と短いものだ。

だから、彼は考えた。

「よし、『外』に逃げよう」

しかし、それはとても愚策で無謀だった。

『外』とは、学園都市の外のことで、ちょっとやそつとじゃ『外』には出られない。

正規ルートでは外出届等の手続きの申請はいろいろと時間が掛かり、その間に捕まってしまう可能性がある。というか、たぶん申請しても今、現在の少年は事件の発端者であつてちよつとした犯罪者でもあるのだから……うん、皆まで言うまい。

だから、強行突破……いや、裏技と控えめに表現して、あの『壁』を超えなければならぬ。

学園都市を円形に囲む『壁』の高さは5メートル・厚さ3メートルで、警備は非常に厳重だ。街全体を二機の監視衛星が常に監視していて、侵入・脱走等をしようとする輩がいれば無人ヘリなどが飛んできたりする……

確か、学園都市最新鋭の無人攻撃ヘリ。通称『六枚羽』は、機体の左右に機銃やミサイルなどを搭載するための『羽』を持ち、回転翼の補助動力として二基のロケットエンジンを搭載、最大速度はマ

ツハ2・5に達するらしいとか。余談では一機に250億円を掛けるほどの超高級品であったり、無闇に破壊でもしたら損害賠償は確実だ……

でも、脱出すると決めた少年は止まらない。今更、止まれやしな  
いんだ。

「んで、『外』に出たら、ほとぼりが冷めるまでアリスの所にも  
匿ってもらおう。うん、それで行く」

アリスとは、少年の恋人の名だが、彼女は現在イギリスのロンドンに在宅している。

脱出 イギリスまでの経路 ロンドンの恋人の元に と、着々に計画を練っていくが……彼は致命的なミスを犯していた。

脱出するのにも、とりあえず着替えや諭吉などが必要だ。

そのためには入院していた病院に戻らないといけないし、寮にも寄らないと駄目だ。

寮は無難に寄れそうだが、病院の方はどうだ？

こんな重傷者がロビーや廊下をこそこそ歩いてたどうなる。堂々と歩いても駄目だ。

ビリビリ少女達に待ち伏せされる可能性も十分にあり得る。さらに、極めつけはイギリスへの入国の際に関してなのだが、少年は自身の入国許可書パスポートを持っているかどうかなんて知らない。

そう、彼は二ヶ月ほど前に記憶を一度失くしている。

昔の事なんて知らない。

ただ、ソレがある可能性の方が高いことは知っている。

少年もどうやら、昔はイギリスの方でアリスと暮らしていたそう  
だ。

（だから……あ、あると信じるんだ、俺！あとは、運に任せるぜ）  
と、励ましても何の意味もない。

まあ、そこは運に任せようと思った時点でいろいろと駄目だが

……彼が不法入国者じゃないことを祈ろう。

さて、そうと決まれば早速、実行に移そうと彼は建物から建物へと飛び移り、結構な高さのあるビルの屋上に着いた。

絶景だ。

ネオンに彩られた建物が綺麗だった。

少し心を奪われ見惚れてしまった。

感動が胸を打ち、涙さえ流してしまうほど、今日の少年は少し頑張りすぎたのかもしれないな。

でも、ここからが本番だぜ！キヤッホー！

クレイジーに行くぜ！ヒーハー！

あーああー！等の奇声は発しない。

少しだけ格好付けて、そこから飛び降りた。

東京タワーやスカイツリーだろうが、そこから飛び降りても少年

は負傷する心配はないだろう。むしろ心配すべきは着地周辺だが、そんなことはお構い無しと言わんばかりに飛び降りた。

しかし……

何の前触れもなく、着地点より数十メートルの所で、パカッ、空間に謎の穴が開いた。

「はっ？なに、これ……おい嘘だろ！？た〜す〜け〜て〜!!」

マヌケもいいところだ。

彼は謎の穴に吸い込まれていってしまった。

そして、この日を境に

少年はこの世界から消息を絶った。

とある外史に呼ばれ……いや、強制連行されて

不幸にも少年は時空を遡り、少し変わった三国志の世界へと

いろいろなフラグを乱立することができる、友情と愛の詰まった楽<sup>ハラ</sup>  
園<sup>ダイス</sup>へと誘われる……のはずだ。

初めましての人も

お久しぶりですの人も

こんにちは

ノベルプロジェクトです

また、性懲りも無くやっちゃいましたが

今作のテーマも前作と同様に『暴走』でやっていきたいと思えます

一応、最終話までの構成は

なんとなく、出来上がったので

早速プロローグを載せてみました

真面目に頑張ります

でも、おふざけもします

それが『暴走』に繋がる一つの要素になるはずですから……

各話のタイトルは前作よりも長めに挑戦しました

センスが無いかもしれませんが、そこはご了承下さい

あと、この主人公の頭のネジは二、三本

前作のラスボスとの接触のせいで緩み

痛い子になりますが、ご了承下さいまし

まだまだ書きたいことは山ほどあるのですが

投稿するのに四回ほど失敗したので

作者の心は折れましたので、以下省略

いつもながら、誤字脱字等は目を瞑ってください

そして、最後まで暖かい目で応援していただければ幸いです



## 01・少女達との出会い Welcome to the parallel

とある宿屋にて。

とある外史に強制連行された少年が目を覚ましたようだ。

知らない天井だ、などと某アニメの少年Sの名言を<sup>セリフ</sup>呟きかけたのを、なんとか喉元で留め、少年・御神リョーマはだるい身体を起こした。

高層ビルから飛び降りる最中に空間に穴が現れ飲み込まれ、意識を失ったから見知らぬ部屋で寝ていた。

状況整理をしたいが、いろいろ困惑しすぎてキャパの限界を超えた少年はまた仰向けに倒れた。

「あつ、お目覚めになられましたか！良かった！」

「ん？」

少女の声が掛けられた。

声のした方を向くと、少女が嬉しそうに駆け寄ってきた。

近くにあった椅子を引き、御神がいる寝台の手前に置き座る。

長い三編み銀髪の少女は、褐色の肌の至る所にたくさんの傷痕が見受けられた。

「もう、目が覚めないんじゃないかと思いました」

まあ、御神は重傷者で絶対安静を言い渡されていたのだが、医者その言葉を無視してビリビリ少女から逃れるために街中を走っていればどうなるか……皆まで言うまい。

彼女曰く、一週間ほど寝ていたらしい。

「もしかして、君が俺を介抱してくれたのかな？」

「は、はい。その、貴方さまが空から降ってきたところを、偶然にも私と二人の仲間と居合わせたのですが……」

空から降ってきたって……って、どんな状況だ。

そうツッコミを入れたかったけど、それよりも先にすることがあるだろ、御神。

身体を起こし、お礼を言った。

「ありがとう。君達のおかげで助かったよ」

「いえ、当然のことをしたままでです……」

若干、ぎこちない笑顔だったかもしれないが、それでもこの少女に感謝の気持ちを伝えることができただろう。

そんな少女はそわそわしながら、期待の目を御神に向けながら、こんな事を聞いてきた。

「……あの、貴方様は天の御遣い様でしょうか？」

「……………」

御神は、笑顔で首を傾げた。

ソレは何？と訴えかける。

たぶん、口を開くと汚い言葉が出るのは間違いなかった。

少女曰く、天の御使いっていうのは、

『乱世に舞い降りる三人の天の御遣い。その者達が集う時、乱世は終わり、太平の世が築かれるだろう』

現在、洛陽で噂されている占い師の予言との事らしいのだが……

「……………」ソレ、嘘でしょ？」

なに、その救世主現るって……

とても胡散臭く、大魔王を倒す勇者が現れる、と言ってるようなものだ。

まあ、御神の反応は当然だろう。

「う、嘘じゃありません！もう、既に二人、この大陸も降り立ったと報告があります。そして、貴方様が最後の御遣い様で空から降ってきたのです！」

「か、顔が近いって！そして、落ち着け！」

「す、すみません！」

慌てて身を引く少女は頬を赤く染めて申し訳なさそうに謝った。

まあ、その予言が本当かどうかはさて置き、だ……

彼女が何者で、ここがどこなのか、などいろいろ情報を知りたい。取り合えず、自分の名前を名乗り、どこから来たのか説明して、彼女も簡単に自己紹介してくれたのだが……名は楽進というらしい。

この世に憂いて、一人でも多くの民達を守りたいがために、仲間と共に義勇軍を結成したとか……？

で、ここは曹操さまが治められる陳留から少し離れた北西の街とか……？

もう、意味不明だった。

曹操といえば、一番先に思い当たるの人物は三国志の魏の曹操だ。で、楽進というのも魏にいた武将であったようななかったような……また思考の海に溺れ、キャパの限界を迎える。

しかし、

「御使い様。次は私の番です」

「お、おう」

次は彼女のターンだ。

混乱しきっている少年に質問攻めが襲う。

「御遣い様。「にほん」やら「がくえん」とし「やらは貴方さまの天の国の地名ですか？」

「……………日本を知らないって、どういうこと……………そして、天の国って……………？」

「質問を質問で返さないでください」

「……………悪かった。そして、少し待って。今、君に分かるように説明の要点をまとめてるから……………ちょ、そんなに……………」

「またもや詰め寄る少女を必死に抑えるが……………この少女、力が御神よりあり、今にも押し倒されそうになるほどだった。」

「なんかこの状況ヤバくね？」

「ムフフ な小イベントが発生しちゃうよ誰か助けて〜、と願ったその時だった。」

「ボタン！と、二人の少女が血相を？きながら乱入してきた。」

「風っ！大変や！黄巾党の奴らがこの街に目を付けよつたで！」

「なにっ！？真桜、それは本当か！くそっ……こんな時に」

「こんな時につて、どんな時？」

まさか、今からムフフなことを本当にしようとしたのか、この子は……とかツッコミ入れないでおこう。

「ああ、奴さんら、ぎょうさん集まってこっちに向かってるらしいで」

関西弁で喋る、真桜と呼ばれた紫色の髪の少女。

この少女……服装が凄い。

上はビキニ水着みたいの1枚で巨乳で福眼、下は作業着風のズボンとベルトと奇抜なファッションセンスのお持ちのようで。

っていうか、君の手に持っているドリルみたいな槍は何ですか？と普通ならツッコミを入れたいところだったが、ただ、そんなこともどうでもいいと思えるぐらいに、今の御神に心の余裕はない。

この少女が喋ったワードによりさらに混乱していく。

「……………黄巾党？」

金平糖の聞き間違いではなさそうだ。

黄巾党……あの黄巾党なのか？と一人唸る少年。

そんな少年に、

「あつ、御遣いのお姉さん目が覚めて良かったの〜。でも、今はそれどころじゃないの〜」

と、もう一人に声を掛けられることに。

薄めの茶色の髪を三つ編みにしたの少女。

丸メガネとそばかすが特徴で、まだ幼さの残る顔つきだが、腰には武器である二本の剣が……

ああ、分かった。

この子のジョブは戦士。関西弁の子のジョブは技工師。楽進さんのジョブは格闘家だ。と、あながち間違ってもなくはない解答に行き着いたりもしたが……

それよりも、

「せや、ここで喜んでる場合ちゃうで！御使いの姐さんも早よ避難せな！」

「御使いの……お姉さん？」

二人の言葉に御神はワナワナと震え出す。

大人になれ俺、と何度も呟く。

「あ、あの……御使い様、どうかなされました？」

「なあ、楽進さん。俺って女として二人に見られているのかな？」

「え、違うのですか？」

「え、違うん？」

「え、違うの〜？」

「……………」

まさか、楽進さんまで……

これはしょうがないのか。

御神の普段の髪型はポニーテールと、その容姿からギリギリ男かどうか見分けをつけることができていたのだが、ビリビリ少女達との騒動のせいでゴムバンドが切れ、肩にかかるくらいのセミロングではもう少女にしか見えない。

今の御神は、これが男？って疑問符を付けられる感じに仕上がっていた。

「俺は男だ」

悲しきかな。

少し、男としての自信がなくなりつつある。

そして、弱い少年の心をさらに容赦なく少女達が抉る。

「み、御遣い様が……男っ!？」

「え〜、絶対嘘なのー」

「そやそや。自分、男っちゆう証拠を見せてみい」

「……こいつら」

ここは大人な対応だ、御神。

仕方が無いと、と言って上半身裸になった。

「な？これで、俺が男だっという事が証明されたる？」

身を張ったぜ的なリアクションをして、男だと示す。

御神の裸体に皆して顔を赤らめている。

「ぬぐぐ、確かに胸ぺったんこなの一」

悔しそうにするそばかす眼鏡っ子。

「はーっはっはっ、ザマアありませんな、と心の中で高笑いする腹黒御神。」

でも、ここで女疑惑が払拭することはできず、

「いや、紗和。姐さんが貧乳って可能性もあるで」

「んなワケあるか！」

「上半身だけじゃ姐さんが男っちゅう証拠にならん！股間も確認せななっ！」

「ふざけるな！それから女の子が股間とか言ったら駄目だから！」

そう、この関西弁のせいだ。

この少女が悪ノリしなかったら、御神の男としてのプライドもヒビが入らずに済んだのだ。

「紗和、手伝ってんか」

「やめろ！俺の股間に手を伸ばそうとしない！」

「ぶ〜ぶ〜。それじゃあ、確認できないの一」

その悪ノリに乗っかる紗和と呼ばれる眼鏡っ子。

「ぶ〜ぶ〜。そんなんじゃ、いつまで経っても姐さんって呼ぶで？」

「お前、確信犯だな！」

「なんのことか分からんな。ってなワケで覚悟しいや！」

「覚悟するの一！」

「あ、やめっ、ちょ、まっ……………楽進さん、たすけ……………」

「……………」

御神のズボンはトランクスマるごと一気に下までずらされた。

パオーン、と可愛らしいとは表現できない、男の凶器ナニが露に……………

最悪だ。

少女達はナニに釘付けになっている。

「ほ、本当に男なの一」

「み、御使い様の……アレが……… / / /」

顔を真っ赤にし、頭から湯気を出した楽進はそのまま後方に倒れた。

「うわ！？ 凧が気絶……いや昇天したで！」

「あはははー、凧ちゃんは男の人のナニを見るの初めてだから仕方がないのー」

「ホンマ初心やな、凧は」

「……お前ら二人はもう少し恥じらいというものを持ってよ」

「私達だって、男の人のナニ見るの初めてだし、少しは恥ずかしいのー」

「少しかよ」

「だってえ……そんな女の子みたいな人にナニが付いてたんじゃあねえ、真桜ちゃん」

一番言っちゃ駄目な言葉だ。

この娘、ホントに容赦ない。

「やな……というか、ソレって本物なん？ 付け離し可能なヤツとちやうんかいな？」

「何それ？ やっぱりお姉さんは男装趣味の変態さんなの？」

「極めて心外だぞ……そのセリフ」

「でもでも。確かめないことにはこの問題は解決しないよねー。という訳だから真桜ちゃん！」

「おう！ ガッテンや！ ってなワケでもう一度覚悟しいや！」

「……ふ、ふざけるなー！」

我慢の限界だった。

いや、むしろここまで我慢できた御神は立派だと賞賛するべきだろう。

悪ノリする二人の少女達に御神チョップが炸裂した。

「うへえ〜。いったあ〜」

「けっこう痛いのー」

「当たり前だ、バカ！ 初対面の人を全裸にして男の大事なナニを掴

もうとする奴があるか！痴女かお前ら！少しは反省しろ！」

「そ、そうやったな。ウチら、ちよつと悪ノリし過ぎたみたいやわ。姐さんこの通り堪忍な」

「う、うん。紗和たちが悪かったの。ごめんなの、御遣いのお姉さん」

「あれれ？女性疑惑が晴れてない!？」

悲しきかな。

世の中、自分の思い通りにはいかないことを実感した瞬間だった。そして、男のプライドを、心を修復するのに、かなりの時間が掛かったのはまた別の話。

「というか、誰かが攻めてくるって状況的にヤバイんじゃないのかよ？」

「そやつ！そやつた！」

「すっかり忘れてたのー」

「……………」

もう、ツッコミを入れる気力もない。

とりあえず服を着て、倒れている楽進を起こした。

少女は顔を赤らめては俯き、目を合わせないようにしている。

とても、気まずい。

どうしてくれるんだ、と少女達に悪態を吐き、今現在の状況を確認した。

真桜、紗和と呼ばれる少女達は義勇軍の召集及び民の避難誘導をしている最中だったようで、

「とにかく、そういう事やから。凧！」

「あ、ああ……あの御遣い様。先ほど話した通り、貴方さまには我々と共に避難所に……」

「俺も戦つよ」

「……え？」

御神は少女の言葉を遮って、自分の意思を伝えた。



「俺も戦うつて言ってるんだ。奴ら、黄巾党はもうすぐにも攻めて来るんだろう?」

「ええ、そうですが。御遣い様、まさかそのお身体で出陣なされるおつもりですか?」

「自分、身体を心配した方がいいと思うで」

「そうなのー。身体は既にボロボロで、一週間も寝たきりの状態だったんだよ?いきなり動くのは身体に毒なの!」

「……確かに、絶対安静ドクターストップは通告されてたけどな」

「ど、どく……た?何ですかそれは?」

「……………」

「ここは、三国志の世界……だと思っう。」

この少女は楽進と名乗っていた。

ここは曹操の領地だとか説明された。

そこに黄巾党が攻めてくる。

さらに、『日本』も『学園都市』も『ドクター』も『ストップ』というワードすら知らない。

本当にありえない話だ。

俄かに信じがたいが……ここが、何処でどういう時代でどういう世界なのか、もう自分なりに受け入れるしかない。

「俺だけ、のほほんと昼寝してる訳にはいかないだろうが!」

「で、ですがっ!」

少女達は知らない。

御神が力を持っていることを。

少年が今までにどんな人生を歩んできたのかわからない。

「心配するな。俺の世界でもトラブル……こういう騒動は日常茶飯事だ。馴れてるよ」

「……御遣い様の世界でも、このような反乱が?」

「いや、俺の国はまだ平和な方だが……まあ、非日常ってヤツはいつの時代でも起きる。俺の親友がいつも騒動の中心いたりして、そんでもって俺も巻き込まれたり巻き込んだりして、死の窮地にも何

度も立つたこともある」

「……」

純白シスターを巡って二人の魔術師と殺し合いしたことがある。三沢塾という予備校に乗っ取った錬金術師と戦ったこともある。一人の少女と友人を救うため、学園都市最強の超能力者と死闘を繰り広げたこともある。

トモダチを守るため魔術師を迎撃するために戦ったこともある。学園都市を守るために魔術師と追いかけて子をしたこともある。恋人を救うために恋人と話し合い、殺し合いをしたこともある。そして、全ての元凶だった最悪のラスボスをこの手で抹殺した。自分には力がある。

傲慢かもしれないが、この力があれば民を救うことだってできる。なのに、自分だけ寝ているとか……そんなことできるワケがない。だから、

「お前達の力になりたいんだ、一緒に戦わせてくれ！」

「……」

寝台を降り、土下座をした。

その誠意に三人は押し黙った。

御神の覚悟は本物だったのだから。

「凧、どうするんや？」

「……凧ちゃん」

「……分かりました。御遣い様、我らと共に悪しき黄巾党を叩きのめしましょう」

「あ、ありがとう！」

手を差し出され、握手が交わされた。

微笑む両者。

それをニヤニヤ見てくる二人はスルーしてだが。

「それでは、改めて……我が名は楽進。真名は凧。隊長、貴方さまに私の真名を預けます。よろしく願います！」

「ウチは李典。真名が真桜ちゅうんや。隊長、よろしゅうに」

「干禁なのー。真名は紗和。よろしくね、隊長ー」

「隊長？ああ、俺の名は御神リョーマだ。性別は男……って、何で自己紹介に性別を言わなければいけないのかわからないが、まあ、こちらこそよろしくな……というか、真名って何？」

「真名をご存知ではなかったのですか？」

「……うん、知らなんだ」

少女曰く、

真名というのはとても神聖なもので、家族や親友など心を許せる人に預けられる大切なものだそうだ。

この真名をどこそ知らない者、もしくはそれなりに交友が合っても真名を授けていない者が口にしたら、それが、うっかりとか、知らなかったからじゃ済まないほどに、冗談抜きで……殺されても仕方がないと切捨てられるらしい。

「もし、まだ風が許してなかった頃に呼んでいたら……？」

「うん、ばつさり逝ってたのー」

「マジか……」

真名、恐るべし……だ。

まあ、御神は二人の悪ノリのせいで真名を口にする暇もなかったが。

「……というか、隊長って、どういうこと？」

「これからは我ら義勇軍は貴方さまに付いて行きますがゆえに『隊長』とお呼びしたいのですが……その、駄目でしょうか？」

「いや、駄目っていうか……俺がお前らを率いるの？」

「そや、ウチらは隊長が空から降ってきた時に、付いて行くと決めたんや」

「早すぎるよその決断」

「ですが、もう決定事項なので変更はしません」

「おい。もし俺が、ものつ淒く悪者だったらどうしてたんだよ？」

「……」

その問いにちよっとした間が空く。

凧は「その可能性もあつたか！」という風な顔をしている。気まずそうに口笛を吹く真桜。目を合わせようとしない紗和。

「……た、隊長、早く皆に挨拶しに行くのー」

「真桜、曹操さんに応援要請は出したか？」

「ああ、それならバッチシや。あとは民の避難だけやで」

「そうか……なら、善は急げだな！」

「あれ？三人揃つてのスルーですか!？」

なんか、慌ただしくなってきた。

というか、もう先ほどの質問は無かつたことにするらしい。

「ほら、隊長。外に出ますよ？」

「いや、待って!」

「なんや、今さら怖気づいたとか言わんといてや」

「あれだけ豪語して義勇軍を率いてやるとか言つてたくせに。ぶゝぶゝ、なのー」

「……俺、率いるとか一言も言つてないから……一緒に戦つとしか言つてないからな!」

「しかし、我々よりも天の御遣い様が率いた方が士気が上がりますので。妥協してください」

「妥協するのはお前らだよ!というか、別にそれはもういいから……」

…それより俺、このままの格好じゃ外に出れないんですけど。カッ  
「いい服が欲しいな」

彼は病院を抜け出してから、パジャマみたいな格好で街中を逃走していたのだから。

そして、そのまమ్まの格好でこちらの世界に連行された。

今更だが、こんな恥ずかしい格好で街中を走っていたのかと赤面する少年。

「……確かに、その格好は戦に赴くようなものじゃありませんね」

「よっしゃ!それならウチがとびっきりのカッコええやつ用意したるさかい!そこで待つとき!」

「頼んだぞ！」

気合いの入った頼もしい声を後に、外に出て行く真桜。

「あー！真桜ちゃん、服のことなら私に任せるのー！とびっきりの可愛い服を選んできてあげるのー！」

「おいこら待て！お前は行くな、紗和！」

聞き捨てられないワードを発した紗和を止めることはできず。

たぶん、紗和のせいで真桜がまた悪ノリするのが容易に想像できた。

女装姿で戦う自分を想像して真っ青になった。

「隊長……貴方さまならきつと、どれでも似合いますよ」

「さ、最悪だ……」

彼女らと上手くやっていけるのか……

先が思いやられる。

御神は不安になり、ため息を吐いた。

01・少女達との出会い Welcome to the parallel

このグタグタ感は何だ……

始めの御神と風のやり取りがいけなかったのか

御神の性別判定の件もグタグタだったし

御神が隊長になった件があまりにも強引すぎだし

最後のシメもなんかグタグタだし

パ、パオーン……言葉になりません

1800年前の過去の平行世界、ここでは『外史』と呼ばれる世界に強制連行された御神。

三人の少女達と出会い、いよいよにイジられ成すがままに……少年の心は深く傷ついたのは無きにしも非ず。

そんな他愛もないやり取りも束の間、『黄巾党』が街にやってくるの事。街の民を守るため、少女達の力になるために、御神は少女達と共に戦う覚悟を決めた。

入院用のパジャマからごく普通の庶民風の衣服に着替え……いや、普通の服を用意されて何よりだ。悪ノリした二人を叱り、真面目タイプの凧という子に足を運んでもらったエピソードは割愛で。

今現在、街には偶然にも曹操の所の将が二人、兵士を連れてきていたとのこと。

御神達の前にいる二人がその将たちで、一人は見た目はクールでそれを裏付ける空色の髪に青のチャイナドレスを着た大人びた印象を持つ少女。もう一人は、対照的にまだお子様な少女だが……この子でも将になれることに衝撃的だった。

人に名を尋ねる前に、まずは自分からとのこと、御神が挨拶した。

「よく来てくれた。そして、なんか成り行きでコイツらの義勇軍を率いる事になった俺の名は御神リョーマ。真名は無い。性別は『男』だ」

何か少し偉そう？上から目線？且つ、性別をちゃんと付け加えているし。

不満に不本意そうな顔をする少年に凧達からのブライニングはスルーして、それよりも一つのお約束となりつつある反応に対処しなくてはならない。

「えっ、男！？うっそだー！」

「本当さ、お嬢ちゃん」

「ふむ……おぬしは『男の娘』であつたか」

「なんか字が違つ!？」

そちらのお姉さんはどうしてそのワードを知っているのか、と問  
いただいたくなる衝動に駆られた。

自己紹介で性別まで言ったのに酷い、と肩を震わせるが……「こっ  
は我慢だ。」

そして、少女達が悪ノリするのも一つのお約束だ。

「えー、隊長つて男なのー？」

「隊長ー。冗談もほどほどにしときゃ〜」

「お前らがほどほどにしとけよ!さっき、ナニまで見せて『男』だ  
と証明しましたよね!」

「ナ……ニ……隊長のノノノ」

ナニかを思い出した凧は頭から湯気を、頬を紅潮させて停止した。

「あははー、また顔が真っ赤なのー」

「あかん、凧がまた昇天したで!どうしてくれんのか、隊長!」

「こうなったのもお前らのせいだよ!」

必死に凧を揺さぶる真桜に御神チヨップが炸裂する。

紗和はそれを見て笑い出し、残された二人はただ啞然とそのやり  
取りを見ているだけだ。

もうこれ以上の悪ノリは少年の繊細な心を本当にマジに冗談抜き  
で碎かれ兼ねない。

だから、御神は真桜と紗和に凧を任せ、取り残された二人に振り  
向き、訊ねた。

「……で、あんた達は?曹操さんの何?将だっけ?」

だから何で偉そうなの?と言いとたくなるが、これは御神の心に  
余裕が無いからとフォローしとこうか。

「ああ、申し遅れた……我があるじ曹操さまの一家臣で名は夏侯妙  
才だ。で、こちらが許緒。よろしくな、御神殿」

「よろしくね、兄ちゃん」



「ああ、よろしく。二人共」

クールな女性が夏侯淵でお子様が許緒。

お互いに握手が交わされた。

ちよつとピリピリしていた御神は微笑んで、その変わり身に夏侯淵が頬を赤らめたのは気のせいだと思いたい。

昨今はギャップ萌というやつが流行っているらしいな。彼女もソレにやられたかのもしれない……しかし、少年には恋人がいるのでそのフラグはあとでへし折っておこうと思つていたり思つていなかったり。

で、紗和がいらんことを言い出して話しがまだ脱線する。

「聞いてよ、夏侯淵さま。この人、今噂されている御遣いさまなの」

「え？兄ちゃんが！？」

「なに？おぬし噂の天の御遣いだと……それは真か？」

「いや……それはコイツらが勝手に奉つただけだ」

「ふむ……そうなのか？」

「それはちやうやる、隊長。自分、空から降ってきたやん。この目でちゃんと見たんやで」

「そうなの。なんか、『いや〜んな感じ』とか言いながら、落つてこちてきたのー」

「絶対にそんなこと言つてねえよ」

俺は某口ケツト団か、とツツコミを入れるが紗和達にそのネタは通用しない。

あつけなくスルーされ、話は続く。

「空から降ってきた、とな………俄かに信じ難いのだが、それも真なのか？」

「私も目を疑いましたが、事実です」

復活した凧が神妙に頷いた。

悲しきかな、真桜や紗和が証言するより説得力があるのは確かだ。「まあ、俺がこの世界に迷い込んだのは紛れもない事実だけだな……」

…ここが俺の住む世界とは時代が違う」

「ふむ……時代がか？興味深いな」

「正確に言つと、1800年後の未来の平行世界からやって来た、だ」

「なんと……」

「未来、ですか……？」

「……平行世界？」

「つて、何なん？」

「にや？ボクには難しすぎて分からないよ」

困惑気味の少女達の反応は当然で必然だ。

御神は苦笑いして、

「と言つても、普通は信じないのは仕方が無いことさ。俺だって他人がそんな事を言い出したら、そいつを痛い奴と判断して距離を置くし。まあ、信じるか信じないかはあんた達次第だが………それより、さつさと作戦会議しないとヤバイんじゃないのか？」

脱線していた話を元に戻す。

今こうしている間にも黄巾党の奴らはこの街を目指し進軍しているのだ。

ずつと、お喋りしてるわけにもいかない。

「だな」

「ですね」

頷く夏侯淵と風。

「……あつ」「」

と、忘れてたと顔に書いてある紗和、真桜、許緒の三人。  
本当に大丈夫か君達。

「ふむ、我が軍が五百、義勇軍が五百。合計千か……」

「敵はその三倍の三千だっけ？大丈夫なのか？」

「どうだろう……しかし、烏合の衆だ。統率は取れていないはず、こちらにも十分に勝機はある」

「あと、どれくらいで奴らが来るんだっけ？」

「……一刻あるかないかや」

状況確認中。

これが初陣だというのに、御神には緊張の色はない。

ちよつと真剣に心配してくれた真桜の方が緊張しているくらいだ。

ただ、その心配を少年がおちやらけたせいで、冷たい目で心に突き刺さることになるのも割愛する……

「それで住民の避難は？」

「もう、ほぼ完了なのー」

「そうか……夏侯淵さん。作戦とかはあるのか？」

「曹操さま達の援軍が来るまで、籠城戦に持ち堪えるしかないんだが……」

「いや、街の外で戦った方がいいんじゃないのか？」

「敵の数は三倍だ。否、もしかしたらそれ以上の可能性もある。伏兵でも潜まれていたら厄介だ……」

「奴等、統率を取れてないんじゃないか？ 作戦とかあるのかよ」

「そういう可能性も無きにしも非ずだ。如何なる場合でも瞬時に対処できねばなるまいからな。考慮するのは当然だろう」

「隊長。『敵の伏兵が出現！ 城門を突破されました！』じゃ困るということですよ」

にしても、弱気すぎやしないか？ と思う御神だったが、戦の『い』の字も知らないガキはそれ以上口を挟むつもりはなかった。

「それより、御神殿も何か案はないか？ 天の国の知識とか、役立つかもしれないのだが……」

「いや、この規模での戦いは初めてだし、だいたい俺の場合はいつも正面突破だからな。作戦なんて滅多に考えないんだ」

「隊長。自分、猪やったんかいな」

「もつと頭使った方がいいの〜」

「うっせ、ほつとけ、そして口を慎め。俺は何も考えずに暴れる方

が好きなの………はあ、しょうがない。作戦でもなんでもないが  
………トッセルマン 人影」

『………(応)』  
「………なっ!?」「………」

御神の掛け声と共にヒトの形を成した影が出現した。

この反応は当たり前だ。

驚くと言われる方が無理がある。

まあ、これが御神の力だ。

学園都市の『書庫』バンクではコレをレベル3『シヤドウコントローラー人影操作』という原石として登録されている。

まあ、この情報は偽物で、最近になってコレが魔術で生み出されたことが明らかになったが………そこら辺の説明はまた今度だ。

「た、隊長………これは？」

恐る恐る風が訊ねた。

皆して獲物を構えて警戒している。

「ああ、コイツはトッセルマン人影と言って、俺の分身みたいなもんだ」

「………五胡の妖術か？」

「妖術? いや、これは魔術だ。といっても似たようなもんなのかな

………まあ、見てて。おい、トッセルマン人影少し踊ってみせろ」

『………(了)』

御神がそう命令すると人影は踊り出した。

なんでソーラン節からの阿波踊りなんだよ、というツツコミを入れないでおこうか。

少女達は目を丸くして、その踊りを見ていた。

「なんと奇怪な………影が動くとはどういう理屈なのだ?」

「うわ、なんだか楽しそうだね? キミ」

『………(楽)』

「隊長のように愛嬌があつて可愛いのー」

「か、かわいい………隊長みたいだノノノ」

何か不穏なことを言っている二人はスルーしよう。

もう、めんどくさい。

「隊長、これが天の力つちゅうやつなん？」

「いや、影の力を行使できるのは俺を含めて二人だけのはず。でも、こういう異能力……例えば、火や風やらを自在に操る者達が俺のいた元の世界にはごまんといるよ」

まあ、ここでは『魔術』と『超能力』に分類されるが、それもまた別の話。

「ふむ……それで、こやつをどうするつもりなんだ？」

「ああ、コイツを黄巾党の敵陣の中に送りこんで混乱を誘おうと思う。こんな世にも奇妙な謎の影が自分達を襲ってくる、という恐怖を与えてやれば困惑し士気に影響を及ぼすはずだしな。敵の数も減らされて、一石二鳥だ」

「それは上手くいくのか？」

まあ、人影のことをよく知らない少女達からしてみれば、愛嬌のあつて隊長みたいに可愛い影さん、と強いイメージが湧かなかつたのも当然と言えば当然か。

だから、少しだけ人影の力を公開した。

「コイツの凄いところは、剣で斬られようが槍で刺されようが弓で射抜かれようが、俺が倒れない限り半永久に動くんだ。ちよつと、剣を貸してくれないか？」

夏侯淵さんの兵士の剣を借りて、人影をなんの躊躇いもせず切り裂いた。

ズパツ、と綺麗に切断される影の胴体に、というか少年の行為に驚いたが……それよりも驚愕をする現象が少女達に襲う。

それは御神の説明通り、人影は切断されたというのに動いているからだ。

そして、でもそんなの関係ねえ、と言うかのように人影の胴体はみるみるくつついた。

「……信じられん」

「ほ、本当に無傷かいな……？」

「凄いな、キミ！」

『……………(照)』  
テレル人影。

許緒は人影に目を輝かせ、凧と紗和なんかは小動物を愛でるかのような目で、いや危ない目で見ている。

「無敵のように見えるコイツにも実は弱点があったりするんだけどな……………まあ、雑魚相手に遅れを取るコイツじゃないし大丈夫だろ」  
多種多様な反応ごちそうさま、と心の中で呟き、御神は人影に命令した。

「という訳で、人影。ドッセルマンここにやって来る黄色い布を付けている連中を再起不能にしてこい。男のナニを潰しても構わん。とりあえず容赦なしにだ。できるだけ多くのザコを蹴散らせてこい！」

『……………(了)』  
「あ、おい待て！」

敬礼をし、その場を後にする。

常人以上のスピードで、少女のスカートを捲り上げるほどの風を巻き起こし、夏侯淵の制止を無視して……………

「秋蘭さま、行っちゃいましたね」

「ああ、行つたな……………まだ作戦会議の途中だつていうのに、な」

「……………ごめんなさい」

「隊長……………」

「凧。そんな目で見ないで。照れるじゃないか」

「……………」

無言の沈黙が痛い。

もの凄く居心地が悪いのだが謝っても今更だと思い、ふざけたらもつと痛い目で見られた。

あとは防柵やら防壁は必須つてことでそちらの作業に取り掛かる御神達。

時間も無いし全員で一致団結してやろうと気合いを入れた。

と、そこで許緒が、

「あ、待って！」

皆を制止させた。

「どうしたんだ？季衣」

「あの、皆にボクを真名で呼んでほしいの」

それは唐突だった。

唐突過ぎて、皆驚いた。

今さっき会ったばかりなのに、とは凧達が言える道理ではないが

……

「えっ、良いんか？」

「うん。皆、大切な民を守るために戦う仲間なんだから当然だよ」

「季衣。お前……」

「そうか。なら、季衣。よろしくな」

「うん、よろしくね。皆」

この子、純粹すぎるよ、と涙を流し心を癒す御神……汚い心、少しは洗い流せれたか？

で、

「あ、待った！」

「どうしたんだ？御神」

この少年も再び動きだそうとした皆を止めて、

「その、あのさ……季衣に便乗して、俺もいいかな？」

ちよつと、照れくさそうに頭をかいた。

モジモジしたその仕草が少女と間違えられる原因で、例え演技だとしてもやっちゃんいけないのだが……

訝しげに見る少女達。

やっぱり女なんとちゃうんか？と心の中でツッコミを入れる面々。

「なんや隊長？自分、真名はないんとちゃうんか？」

と、真桜が少しめんどくさそうに訊ねると、

「いや、真名はないんだけど……これからは俺の事を親し

みを込めて『お兄ちゃん』と、そう呼んでほ……」

「無理や！」

「無理なの」

「無理です」

「無理だな」

「即答っ!？」

一瞬のフリーズさえ許さない、拒絶の4連続コンボ。

大量のおじゃまぶよが降り注ぎ、御神の心を叩いていく。

「……それは隊長の趣味が混ざってはいないですか？」

人ってここまでヒトを冷たく見れるの?とツッコミたくなるような冷たい目だった。

「趣味って……ちょっとばかり危ない変態さんだったのー?」

リアルに身を引く少女、いや少女達。

「もう、ドン引きやで隊長」

キモッ、とか言われた。

「凄いいわれようだな、御神……そして、私もドン引きだ」

その視線が痛い。

「……マジで?」

「ああ、マジだ」

「あははー……兄ちゃんって面白い人なんだねー」

季衣のフォローになっっているのかよくわからないコメントも込みで、御神はビククサイズのおじゃまぶよによって完全鎮圧された。



御神が送り放った人影はというと……ポーズを取っている。

街外れで一人、ボディビルダーがやっているあのポーズだを取っていた。

シルエットも普段は御神をベースにしてるが、この時ばかりは、はちきれんばかりの筋肉達磨で見事な腹筋をしていた。

究極の肉体美、というやつだ。

前方にはあの黄色い布を付けた賊党たちが迫ってきているというのにも関わらず、ポーズを次々と変えていく。

「あ、兄貴……あ、あれは何ですかねえ？」

「……お、俺に聞くな」

「う、五胡の妖術なんだな」

遠目に見える筋肉達磨のシルエットに警戒するが、足を止めることはしなかった。

『……（一）』

「と、とにかく街は目と鼻の先なんだ。てめえら、アレがなんだか知らんが怯むんじゃねえ！」

「……おおー……！」

兄貴と呼ばれる男の掛け声で無理やりにも士気を高め、突っ込んでいく。

『……（撃）』

「張角の頭の話だと、あの街には美人な女がてんこ盛りって話だぜ？」

「それは心が弾むんだな」

「けっひっひ。それは楽しみですね」

下衆な考えしかない賊党共は、これからことを妄想しては卑猥な笑みを浮かべた。

「おうよ。だから、たった一人にこの大群を止められるワケがねえ。死ねえー！」

「そつだ、そつだ！死ぬんだな！」

「きええええ！！！」

先頭にいた兄貴と数十名が一斉に獲物で人影に突き刺した。

『……………(必)』

しかし、その程度では影を再起不能にすることはできない。

「……はっ！？」「……」

「効いてない？」

「う、うわー！動いているぞ！？」

「こ、こっち見た！？」

そんな事を知らない賊党共は驚愕し、動揺した。パニくる賊党。

「お、落ち着け！確実に首……………を」

兄貴が何か言おうとしたが、それも時既に遅しだ。後悔した。

コイツに関わらなかつたらよかったと。

いや、違う。

あの街に手出ししようとしなければよかったと……………後悔することになった。

『……………(殺)』

そう、賊党の殲滅に人影が始動したのであった。



## 02・黄色い布を付けている賊党 Start of the shadow

一撃必殺ッ!!

人影の描写が少し、気に入らないですが更新しました

そして、修正

自軍の兵力を五百減らしての千にして緊張感を出させようとしたが、結局は御神達のやり取りのせいで緊張感とかどうでもいい感じになっちゃうのorz

クールな夏侯淵とお子様な季衣と一緒に戦うことに……

黄巾党が街を攻めてくるまで、残り時間はあと僅かだ。

御神達は必死に防柵を作っていた。

そんな中、

「夏侯淵さまっ！大変です！」

伝令役Aが血相を変えてやって来た。

「どうやら只事じゃないらしい。」

嫌な予感が過ぎり、皆にもそれが伝わり緊張感が空間を支配した。

「どうした？」

「はっ。あの、御遣い様の影と黄巾党の戦況報告なのですが……」

ああ、そう言えば、一人走りした人影ドッヘルマンの後を数名の兵士達に追わ  
せていたのな、と他人事のように思い出す御神。

「そや、隊長の送り放った影はどうなったんや！」

「真桜。興奮し過ぎだ」

「でもでもー。興味あるのー」

「だよねー。あの子、めちゃくちゃ可愛かったもんね」

「カッコ良いの間違いだろ？」

鼻を膨らませて興奮する真桜。

それを鎮めようとする凧も、どこか落ち着きがない様子。

紗和も興奮気味だし、季衣は見当ハズレなことを言っていたりする。

「というか、アイツあんまり役に立たなかったか……」

兵士のあの慌てっぷりだと、人影は三千の黄巾党全員には対処できなかつたのだろう……と、御神は結論付けた。

まあ、少しでも動揺、かく乱させたら上出来もの、だとその程度に思っていたし、だから大して気にしていないような口調だった。

「よし……季衣。今すぐ布陣準備に取り掛かれ」

「は〜い」

夏侯淵も、それを察し兵士に召集を掛けようとする。

「俺たちも往くぞ!」

「了解っ!」

御神達もやる気全開だ。

どちらの隊も士気が高い。

この勢いで行くぞ、と意気込む少女達だったが、

「いえ、少し待って下さい!ちゃんと報告を最後まで聞いていただき  
きたい!」

という、伝令役Aがそれに制止を掛けた。

「何だよ?今、良いところだったんだよ。水を差すな、邪魔するな  
よ」

「す、すみません……って、なんで私が謝らなければならないんで  
すか!」

「ノリ……だよな?真桜」

「せやな。ノリや。せっかく盛り上がったたのに、自分どうして  
くれんねん?」

「ええっ!?そんなバカな!」

「……………」

よくあるパターンだ。

伝令役Aは驚愕の表情を露にする。

「……二人共、あまり私の部下をイジメてくれるな」

あまりの理不尽さに伝令役Aを庇う夏侯淵。

御神達の悪ノリは、涙を浮かべるほどだったようだ……伝令役A  
が泣いている。

まあ、そんな事どうでもいいけどな、と御神は伝令役Aをさらに  
冷たく突き放して、

「で?人影は敵をどれくらい倒したんだ?千人?いや、五百人……  
ドッヘルマン

まさか百人にも満たなかったのか?おいおい、十人ぐらいは倒して  
くれよ、兄弟」

と、勝手に話しを進めた。

一人演技する彼は立派な役者になれるだろう。

だが、少年ではハリウッドは狙えない。

せめて、『男の娘』で挑むべきだな。

「隊長。大丈夫か？本当に」

と、真桜達の痛い視線を再度受けることになるのだが……

もう、こういった描写はカットしようかと迷ったりもしている。

めんどくさい。

そして、御神の言葉にようやく自分の言いたいことが伝えられると、チャンスは今しかない、話しだす伝令役A。

「いえ、あの……その、わたくしも目を疑いましたが……」

しかし、少し言いくそうに躊躇った。

少しの間が空き、自分を見る少女達の視線に気付き、覚悟を決めて告げた。

「黄巾党、約三千の軍団は壊滅しました！」

と、確かに告げた。

「……………」

沈黙が訪れる。

御神を含め全員が耳を疑った。

影一人に対して三千は流石に対処できないだろう、という御神の見解もあったが故にこの報告は、予想外以外の何物でもなかった。

ははっ。もう、何が何だか、という具合に少女達はキャパの限界を迎えようとしていた……が、伝令役Aはまだ続きを喋っていく。

「御遣い様の影に恐れをなして、我先にと逃走をする者が多発し、それに追い討ちを掛けるかのように、影が一人、また一人と黄巾の賊党を再起不能にしていきました」

その報告にゾツとした。

その言葉を自分達なりに解釈し、あやふやな想像ではあったが想

像してみる。

三千人を一人で相手した、半永久的に不死身なヒトの形をした何かに、容赦のなく逃げ惑う自分達を追い詰めていく……そう思うと鳥肌ものだ。

「……た、確かなのか？」

「ええ、信じ難いですが、事実です」

「……」

夏侯淵の問いかけに何の揺るぎもなく返答して見せた。

「う、そ……だろ？」

この中で一番驚愕している、力の根源。

演技がやや入っているが、本当に予想外だったようだ。

「いや、隊長。貴方まで驚いてどうするんですか」

「いやいや、だってアイツそんなに強くないもん！三千とか全員相手できるワケないし！」

「でも三千の敵を蹴散らしたのは事実らしいのー」

御神は知っている。

今の人影ではそこまでのパワーが出ないことを。

よくて千ぐらいが妥当だと思っていたところに、壊滅の二文字。信じる気になれないでいる。

しかし、ありえないとは言いつれならないところが、アレの恐ろしさでもある。

だから、御神は訊ねた。

人影が具体的にどうやって敵を壊滅させたのかを。

「えーと、その……もの凄く御遣い様に失礼なのは承知で伝えますが……その、殆どの賊党は皆、股間を潰されて戦線離脱という形が主な原因となっています」

「ああ、なるほど」

「……」

うん、納得した。

ただ、少女達からの視線がまた痛い。



そう言えば、人影に命令を下した中に、ナニを潰しても良いって  
言ってたっけ？

だから、人影はその命令を忠実に実行に移したのだろう。

一人、また一人と命<sup>タマ</sup>じゃなくて男の玉<sup>タマ</sup>を潰していく。

奴らは命を狙われるより恐怖したのだろう。

「ま、まあ、この街を攻めて来ないんなら、戦わずに済んだのだから結果オーライってやつだな」

「男の人のナニを潰すとか……………隊長は極悪非道なの」

「本当に男の大事な所を狙うとわな。ウチにはそんなムゴい命令は出されへんで」

「…………隊長。さすがですね」

「兄ちゃん。卑怯だよ、ソレ」

「私は皆まで言わんぞ。御神」

「皆の視線が痛い！その、下衆を見るような目が心を抉っていくっ！」

まあ、御神の心一つの犠牲で、街も民も兵士達も失わなかったことを考えれば上出来だ。

ただ、少女達だけでなく兵士達までにも、冷たい視線を向けられていたのがちと痛かったが。

これにて、一件落着だ…………のはずだ。

少しの刻が過ぎ、上機嫌にスキップなんかしながら帰ってきた人影。<sup>ルマン</sup>

日ごろの鬱憤を晴らしたかのような、そんな清々しさはナニをしたのかはもう皆まで語らなくいいだろう。

そして……

援軍要請を受け取ってやって来た者達との対面を果たす。

軍団の先頭を馬に跨りやってきた三人の少女達。

右から、黒髪オールバックの少女、金髪ロリ少女、猫耳フードロリ少女、とまたしても少女だらけだ。

この三人のどれかが曹操なのか。

いや、名乗らなくても分かった。

真ん中にいる金髪少女がたぶんそうなのであろう。

両側に並ぶ少女達とは違う、威圧みたいなのを感じ取れた。

仮に霸王と呼ばれる人物だ。

それなりの威圧感があつて当然なのだろうと自己完結する御神だったが、

「うおおおおおおおー！」

「あん？……ぐふおっ！??」

「……隊長ーッ！！」「」「」

突如、馬から降り駆け出した黒髪少女が、猛スピードで御神と衝突した。

竹とんぼの如く、回転し吹き飛ばす少年。

入ってあんなに回転するの？ってツツコミたくなるぐらいで、飛距離もかなりのものだった。

そして、撃沈。

頭部から落下したようだが、まあここはギャグパートだから無傷だろう。

負傷の心配はしなくて良い。

悲しきかな、少女達は少年を助けに行こうとせず、黒髪少女の方へ向く。

「秋蘭！季衣！無事かっ！」

「姉者……ま、まあ見ての通り、無事だ」

「春蘭さま………兄ちゃんが」

夏侯淵が姉者と呼び、季衣が春蘭と呼ぶ少女は……御神を吹き飛ばしたことには何の気にも留めていない、いや気付いていない様子。どうやら夏侯淵と季衣が心配だったのだろう。

だから、眼中になかった御神を障害物程度と認識して、そのまま突き進んだということだ。

顔を引きつる夏侯淵、季衣、凧、紗和、真桜に黒髪少女は首を傾げる。

その仕草がたまらなく萌えだが……

「二人とも無事で何よりだわ。損害は……ないようね」

金髪少女が声をかけてきた。

それに後に続く猫耳フード少女。

周囲の街の様子を見渡し、少し御神の方へ視線を送り、「うん、

問題無し」と頷き夏侯淵達の方へ向き直る。

きつと、気のせいよ、と呟く金髪と猫耳フードの少女。

「はっ。彼女らの……いえ、影のおかげで街も民も我々も無傷で済みました」

「……影？」

「……（照）」

夏侯淵は人影を少女達に紹介した。

人影は頭を？くしぐさなんかをして照れていたりするが、

「な、なんだ、これはっ！」

「五胡の妖術！??」

まあ、二人の反応が当然だ。

黒髪オールバックと猫耳フードが警戒をする中、金髪ドリルは、  
「ふむ……これは？」

訝しげにもするが、さして警戒することもなく人影をまじまじと観察した。

人影は喋ることができない。

代弁に凧が一步前が出る。

「こちらは天の御遣い様であられる我が隊長・御神リヨーマ様の力で分身のようなものだそうです」

「へえ、あの噂の………で、その者は？天の御遣い様とやらは誰なのかしら？」

凧達三人に視線を移すが、悲しきかなそこにはいなんだよ。

「あっち吹っ飛んでったのが隊長や」

「あそこで撃沈しているのが隊長なのー」

「「「……………あ」「」」

やっちまったな。

そんな声がどこからか聞こえたような気がした。

ほどなくして御神が復活した。

「ぐすっ…………あのね、あのお姉ちゃんがね、ボクを苛めてきたの」

「そうか、そうか。そら、辛い思いをしたんやな。ウチが味方したるさかいな、ウチの胸で泣き」

うえ〜ん、ママん、と嘘無きする少年と悪ノリをする真桜。

黒髪少女が申し訳なさそうにしているが少年達はスルーし、何も無かったかのように話は進行する。

お互いに自己紹介が行われ、黒髪少女は夏侯惇で夏侯淵の双子の姉だそうで。

猫耳フードが荀？。そして、御神の予想通りに金髪少女が霸王の曹操だった。

凧達も名乗り、ここまでの経緯を話したり…………もちろん、少年の自己紹介の中には性別も入っており、

「あ、あなた、男なの？」

「この、容姿で…………男…………ですって!？」

「う、そ……だろ？信じられるものか！」

「本当だよ、お嬢さん達」

と、お約束の展開になる。

曹操、荀？、夏侯惇の反応に、御神は大人の対応でこなす。

「え、隊長が男なのー？」

「うそや！冗談はいつもやめ……」

「もう、そのネタはいいからな、二人共。三度目は無いぞ？」

「ぶ〜ぶ〜」

「……………」

「貴様、本当に天の御遣いとやらなのか？」

「失礼よ、春蘭」

そう訊いてくる夏侯惇に苦笑いをした御神は、

「まあ、時代を遡ってやってきたのは確かだが、俺はそんな大層な人間じゃないよ。そこら辺にいる一般人と変わらない、ごく普通の少年だ。そして、そんな俺の事は親しみを込めて『お兄ちゃん』とそう呼んでくれ」

「……………」

またかコイツ、とめんどくさそうな顔を風達にされた。

だが、これもまた一つのお約束だ。

「……………無理よ」

「絶対無理。というか、あんたキモイわよ？」

「わたしも無理だな」

「そんな〜」

「……………泣くな御神」

ぐすつ、と泣く少年に夏侯淵が優しく慰めてくれたのは唯一の救いだったか。

「まあ、何にしても……あなたがいなければ、私は大切な将を失うところだったわ。秋蘭と季衣を助けてくれてありがとう」

秋蘭……？ああ、夏侯淵の真名か、良いね。とそう思いながら、

「いや、礼を言われるほどの事は俺はしてないけどな。黄巾党を蹴

散らしたのはコイツのおかげだ。お礼を言つならコイツにしてくれ」  
「そう。あなたのおかげなのね。ありがとう」

『……………(照)』

曹操が頭を下げ、人影トッヘルマンにお礼を言った。

そんな人影は……………よせやい、照れるじゃねえか！と言っているよ  
うな気がした。

「……………本当に面妖だな」

「……………何で影が動くのよ」

「でもでも、可愛くないですか？春蘭さま」

「うむ……………なんというか、愛嬌があるというかな……………その」

「ん？」

人影が注目されている中、ちらちらと御神を窺ってくる夏侯惇。

さきほどの衝突の件のこと謝罪をしたかったが、中々タイミン  
グが掴めないでいる様子。

御神はその視線に首を傾げ、その仕草に慌てて視線を逸らす黒髪  
少女。

「こんなの春蘭じゃない。」

キャラ崩壊か？どこのラブコメだ、と作者は思ったのも無きにし  
も非ずだ。

そんな彼女の心境を悟ったのか、夏侯淵は微笑み、腹の中では何  
か良からぬ事を企んでいるのはまた別の話だ。

「さて。そろそろ本題に入っていいかしら？」

そう、告げる曹操は改まって御神達の方に振り向く。

本題。

もう、おふざけの時間は終わりだ、と言われたかのように、そう  
告げられ、御神達の表情は引き締まった。

そして、曹操は言葉を放つ。

「あなた達、私の下で働いてくれないかしら？」

「俺達が……………あんたの部下にか」

「え、それは本当ですか、曹操さま！」

「ええ、本当よ。民のため、私の霸道のためにあなた達の力が必要なの」

魏のために、曹操のために働く……それは、予測できたものでもあった。

夏侯淵、許緒と出会った時には、そういう可能性もあると頭の隅で考えていた。

主人公は曹操と霸道を歩む……それもまた一つの物語だ。

それとも勧誘を断り、魏ではなく、蜀の劉備 or 呉の孫策の下に付く……それもまた一つの物語だ。

または、己が主となり、風達と共に太平の世を目指す第四の勢力を作る……それもまた一つの物語だ。

この選択によって、御神や風達義勇軍の人生を変えていく。

#### 運命の選択。

分岐点の分かれ道、と呼ばれるものだ。

ただ、もう御神の答えは決まっていた。

少年は夏侯淵達の方を見ると、

「それは良い考えですな、華琳さま。私も是非にと御神殿たちを勧誘しようかと思っております」

「うん、ボクも兄ちゃん達が本当の仲間になってくれたら嬉しいなあ」

と、そんな嬉しい事を言う二人。

風達三人も後ろの方で、キャツキヤはしゃいでいる様子。

「まあ、曹操さまが言うんだったら仕方がなしだな」

「そうね。あんた、女顔だから許してあげるわ」

と、素直じゃない二人。

二人の反応に苦笑いする少年だが、これを聞いて決意を固めた。

御神は目を少し閉じ、一回深呼吸をした。

(それに皆可愛いしハーレム万々歳で役得だ)

などと、邪な考えもあるが……

「せいぜい俺を上手いこと使っただな……よろしくな、曹操さん」  
劉備や孫策と共に、などという回答などなかった。  
始めからコレ一本だった。

「なんで偉そうなのよ……まあ、せいぜい上手いこと使ってあげるわ。よろしくね、リョーマ」

ニヤリと口の端を吊り上げる二人。

互いに握手が交わされた。

それを暖かい目で微笑む少女達。

こうして、日中友好じよ……

じゃなくて、御神及び凧達義勇軍は霸王の下で働くことになりましたとさ。

と、話しが終わればよかったのだが……



どうやら問題が発生したようだ。大事態だ。  
黄巾党が再び街を攻めてきた、という訳じゃない。  
ただ、曹操たちは知ることになる……厄介な仲間が加わったと。

『……………(遊)』

半ば空気と化していた人影が、遊んで欲しいが故に逃走した。  
御神は慌てて少女達に事情を説明した。  
自分は記憶喪失だ。

だから、影の制御法を知らない。

だから、時々こうやって逃走すると。

人影を放っておく、とい選択肢はない。

人影はイタズラ好きだ。

さらに、好みの女性にはえっちな行為をしまっ可能性がある。  
あんなことやこんなことと、ムフフなイベントよろしくその女性  
は一つのトラウマができてしまっかもしれない。

だから、今すぐ人影を捕えなければ大惨事にも成りかねない……

「なんだ、それは!？」

「リヨーマ。天の国では相当苦勞しているようね」

「華琳さま、そんな悠長なことを……」

「秋蘭さま!影ちゃんが屋根に飛び移りましたー!」

「くそっ、逃がすなー!追えー!追えー!」

と、それを聞いた少女達は慌てて追いかけた。

『……………(嬉)』

否、少女達だけじゃない。

曹操軍総出で、人影の捕獲に取り掛かった。

そっ、『人影捕獲大作戦』が始まった。

ただ……

「よっしゃ！追い詰めたで！」

「隊長、今ですっ！」

「今しかないのー！」

「任せとけ！ふはははっ！チェックメイトじゃボケエエエエエエエ

エ！……………そげぶっ！??？」

「……隊長……っ！?」「」「」

この人影、一筋縄ではいかない曲者だ。

御神はドラゴンスープレックスをキメラられ撃沈。

そして、少女達の策とは裏腹に人影は一向に捕まらず、日付が変わるぐらいまで追いかけてこをするハメになったとか。

少女達のトラウマの一つにもなったのは無きにしも非ずだ。

戦闘描写をカットしたいという怠慢な考えで、こっぴどなりました  
御神の十八番は卑怯だから、男のナニを潰すのとかもアリだと思っ  
たり

黄巾党の皆さんに同情しかできません

ただ、逃走した黄巾党を討伐するかどうか悩んだ挙げ句、ばっさり  
とこれまたカット

ナニを潰しておいてまだ追い詰めようとするのか、この外道……と、  
思ったりやはり同情の念があった次第

彼等は今後、ニューカマー新人類として生きてもらいましょう

後半の曹操たちの出会いとか、そこら辺の描写が非情に下手で何と  
も言えません

御神達義勇軍が曹操と出会って仲間になったと、要点をそこだけ踏  
まえてくれたらいいかと……

そ、それでは……さようなら

注意

タイトル、可變くしてみました

曹操の所でお世話になることになった少年の名は御神リヨーマ。性別は『男』で、よく、少女と間違われがちな容姿をしているため、最近では自己紹介には、二重括弧を付けるようになった。

16歳にして現役の高校生と、日本の学園都市からタイムスリップしてきた天の御遣いだ。

そんな少年のお仕事は街の警備と漢文の勉強だ。

街の警備は凧、紗和、真桜の三人と『御神隊』を結成させ、さらに天の国の知識を生かして、新たな警備体制を整えた。

そのおかげもあってか犯罪率は減り、治安は良くなっていった。

勉学の方は主に秋蘭か桂花に教わっている。

秋蘭とは夏侯淵の真名で桂花は荀？の真名と、御神がこの世界に降り立った日の騒動の後に、少女達から授かった。

曹操の真名は華琳、夏侯惇が春蘭といらぬ説明かもしれぬが、ここに記する。

で、勉学では季衣と一緒に学ぶことがあったりして、秋蘭と二人でイチャイチャできる最大のチャンスを逃したりもするが……これはまた別の機会に話せばいいかな〜と思ったり。

まあ、そんなこんなで、御神はなんとかこの世界に適應している。

そして、今日もまた、一日が始まるのであった。

早朝。

時刻は不明。

御神の部屋にて扉が大破した。

ドガン、と大きな音を立て吹き飛ぶ扉がまだ夢の中の御神に直撃する……

「ぶへっ!?!……………なっ、て、敵襲かっ!?!」

頭をやられた少年は覚醒を遂げた。

シユバ、つと素早く戦闘態勢に入るが第二撃はやってこなかった。あれれ？と思ったところで声が掛かる。

その声の主は、扉を壊した犯人だ。

「……奇怪な風習だな。入るぞ！」

そう言っつて部屋に入ってきたのは春蘭だった。

なんの悪びれもないその態度が潔く清々しい。

御神は睡眠を邪魔されたことに不満を訴えかける。

「な、なにやっつてんだよ！？ふざけるな！常識を考えろ！新手な嫌がらせか！？」

「それを言いたいのはこちらだ。扉を全力で吹き飛ばして来意を知らせるなど、どういふ風習だ？」

「………どんな風習だよ、それ」

「のつく、とかいふのだろう？貴様の国の風習だと、華琳さまはおつしやっつていたぞ」

「ああ、あいつにそんなこと教えたっけ……………つて、軽く叩くだけでいいんだよ。コンコンって」

「……………ん？」

御神は壁を叩いてノックをして見せた。

しかし、意図が伝わらなかつたのか、それを見ても首を傾げるだけの春蘭に萌えだ。

「春蘭。その仕草はやめろ、俺のどツボだ。萌えるから」

「壺？燃える？？き、貴様はなにワケの分からんことを言っつておるのだ？」

「あー、え〜と、こつちの話……………というか、そもそも別に部屋の外から呼びかけるだけでもいいんだ。『ご免あそばせ〜』とか、『お兄ちゃん、お部屋に入つて良〜い？』とかな」

「……………貴様の趣味が混ざつてないか？」

「お、お兄ちゃんじゃなくても、『今から入りますよ』と一声が欲しいんだよ。お前も急に誰かに部屋に入つてこられたら、不快に感

じるだろ？まして扉をぶつ壊さられたら怒るだろっ？」

「当たり前だ。そやつ首を引き千切ってやるさ」

「いや、それだけは止めとけ……でも、俺の言いたい事はわかったか？」

「ああ、そうだな……すまなかつたな、御神。そして、おはようだ」「うん。おはよう、春蘭。そして、この扉はどうしてくれるんだ？お前が直してくれるだろっな？」

「ああ。貴様のためなら特別にやってあげてもいいが、タダじゃないぞ？それなりの報酬はきっちり貰うぞ」

「いや、そこは無償でやれよ。というか、お前が壊した扉だよ、それ」

朝から疲れるな、などと重いため息をつく。

ここは自分でなんとかするしかないのか……

御神は人影ドットヘルマンを出現させ、扉を直すよう命令した。

「……（了）」

がんばれ人影、と声援を送り、春蘭の方へと向きなおす。

「で、なに？春蘭はここに何の用？……はっ、まさかっ！？こんな昼間っから俺とムフフ なイヤらしいことをしようとしたのか！」「んなワケあるか！いや、それは別の機会にでも……じゃなくてっ！華琳さまがお呼びだ。付いて来い……／＼／＼」

赤面する少女。

照れ隠しにて御神の腕を掴んだ。

「おいっ！腕を引っ張るな！？げるから！そして人影ドットヘルマン、早く来い！じゃないとレベル0の無能力者の御神が完成してマジで腕ザコが？げるから！！」

「……（笑）」

「笑ってんじゃねえよ！早く助けろって、マジで！」

今の御神は常人ザコだ。

猛将の腕力に勝てるワケもなく、ただ成されるがままに……

というか、こういう時の人影は薄情なもので、「ソレをつまみに

一杯やるうや」という感じで、ただ面白がっているだけで力を貸してはくれやしない。

というか、たぶん『扉の修理を優先させる』と命令を忠実に実行している最中なのだろう。

言い方を変えれば『融通の利かない奴』だ。

人影は、少女に成すがままに引きずられ連行される少年に手を振り見送った。

玉座の間にて、

「随分と遅かったわね」

華琳の不満の声に、辺りに緊張が走る。

春蘭はそれを逸早く察し弁解を求めた。

「はっ。申し訳ありません！こやつを支度に手間取りまして……」

「おい、嘘を付くな。お前が俺の部屋の扉をぶち壊して口論になった、ってちゃんと見えよ」

「あ、おい！それは内緒のはずだろ！」



「誰が内緒にするかよ。バカかお前」

「なんだと、貴様あ！」

「……………」

と、またもや口論を繰り広げることになった。

少年少女は「貴様が悪い」や「お前が悪い」などと罪の擦り付け合いになったり、周囲からは「やれやれ、またか」と悪態を吐かれたりと、毎度の光景だった。

この二人は仲が良いのか悪いのかよく分からない所があるが、まあ今はその話は置いてどうか。

霸王がお怒りのようだ。

華琳は額に青筋を立てている。

あ、やばっ、と誰かが声を漏らしたと同時に、御神と春蘭は鎮圧されることになった。

「こほん……話をしてもいいかしら？」

「はい。いつでもどうぞ」

頭にたんこぶを三段乗せて、正座をする少年達。

だいぶ、反省している様子だ。

「リョーマ。今日までの黄巾党の討伐に差し当たって、あなた達御神隊の報告書を見させてもらったわ」

御神の仕事は街の警備と勉強だけじゃない。

当然、今も流行りの黄巾党討伐に参加している。

御神隊の隊長として、凧達と共に周辺地域に出向いたりしているワケなのだが、

「ただ、この報告書の……これは誰が書いてくれたのかしら？曖昧で良く分からないのよね……そう。これなんか、『恐らく、御遣い様は影を使用したのだらうか……敵を殴ったのではなく、斬ったような気がする』って、どういうこと？あの影は剣にでもなれるの？」

少女は手に持つ書類をぺしぺし叩きながら、そう訊いてくる。

ああ、よくよく思い出してみれば、華琳達に影シヤトルの特性を詳しく説明していなかったっけ？などと、他人事のように思い出した少年。  
「あとは……これとか特に酷いわ。『恐らくではあるが、影を身体に纏ったのだろうか？御遣い様の動きが一瞬早くなっただような、なかったような……れれれのれ』って、もの凄い曖昧で、あ・や・ふ・や！そして、これを書いた者は私をバカにしてるのかしら！？」

その報告書を書いたのはたぶん、れれれのおじさんだ。

「お、落ち着けよ華琳。せつかくの可愛らしい顔が台無し……いや、怒った華琳もそれはそれで良いな。そそのものがある」

「ほお、なかなか分かっておるではないか、御神。見直したぞ」

「当然。俺を見くびるなよ、春蘭」

「……………」

正座をしながらハイタッチをする二人は珍妙な絵になっていた。

やっぱり仲良いのか？というか、あなた達は十二変態発言を本人の前で言っているの？とツッコミを入れたくなるのだがスルーしておこうか。

「まあ、あなた達の問題発言は置いて……リョーマ。あなたの影の力をちゃんと把握しておきたいのだけど、私達にも分かるように説明してくれるかしら」

「まあ、いいけど……説明するより、実際に戦ってる所を見てくれた方がいいと思うけど？」

御神はファイティングポーズを取りジヤブを試みせた。

「ふむ。それもそうね……じゃあ、誰か。リョーマと戦いたい子はいるかしら？」

「はいっ！はいっ！！はいっ！！御神、わたしと勝負しろ！！」

「あ、ボクも兄ちゃんと戦ってみたいな」

「ふむ。私も一戦申し込みたいですな」

「ウチも一回やってみたいわ」

「紗和も隊長とやってみたいのー」

「二人は何か字が違わなくないか？」

「そんなことないで、凧」

「凧ちゃんを考えすぎなのー」

「ははっ……モテモテだな、俺」

と、玉座の間は急に騒々しくなった。

華琳は少女達を見て微笑み、

「じゃあ、春蘭。あなたにお願いするわ」

「はっ！」

指名された少女は素早く立ち上がり返事をする。

他の面々は指名されずがっかりしていた。

「まあ、春蘭さまなら文句言われへんな」

「また、次の機会があるのー」

「……だな」

「ちえ〜。ボクも戦いたかったな〜……春蘭さま！ボクの方まで頑張ってください！」

「おう！任せろ！そして、御神は覚悟しろ！」

「分かった分かった……って、春蘭。だから、腕を引っ張るな！？  
げる、？げる！」

少女に腕を引っ張られ、強制連行されてしまう御神。

力が出せないところを見ると、どうやら影は、シャドウ人影は今のこの状ドッヘルマン

況を楽しんでいるようだ。

『……（笑）』

ギアアギアアと煩い二人は誰よりも早く玉座から姿を消した。

城内の庭に移動した少女達。

「バツチこ〜い」

御神VS春蘭の戦いのゴングが鳴った。

御神は脚を開き腰を落とし、膝に手を付いては野球でいう所の守備の構えに入っていた。

左手にはグローブを付けているかのように、そこに右拳を軽く叩きつけては野次を飛ばし挑発している。

「ふっ、貴様の余裕もそこまでだ！この夏侯元讓を本気にさせ……

っ！？」

ゾクリッ。

背後に何か気配がした。

影による強襲だ。

腕だけが突然地面から生え、グーの拳で背中を狙った。

しかし、流石というべきかソレに反応し少女は防いでみせた。

だが、御神も流石というべきか敵に隙を与えるつもりはなく、影の剣を形成させては突っ込んでいく。

ただ、それも彼女は反応し影の剣と大剣が交わった。

「貴様………背後からの不意打ちとは卑怯だぞ！」

「ははっ、俺は勝つためだったら卑怯な手も使う『男』なのさ」

「……………っ！？」

春蘭を力で押し負かし、そこを狙っては鳩尾にややアッパー気味に突き出した。

少女は身体を捻り回避するが、少年の強襲は止まらない。

影を纏った回し蹴りからの、上段・中段・下段と影による三箇所同時蹴りが襲ってきた。

御神の二本の脚ではなく、腰から生えた三つの影の脚に、なんとか頭部は防御してみせたが、横腹・脚と諸に喰らいよるめく。だが、それだけで御神のターンが終わるワケがなかった。

少年は言葉を放つ。

「ほら、体制を立て直すのを待つほど、俺はお人良しじゃないぞ？」  
「っ!??」

またもや影の剣を手にして頭上から振り降ろす。距離など関係なかった。

今度は鞭のようにしなやかにソレは少女を襲う。

防御さえはするが、ただそれだけ。

重たい一撃を受け止めた反動に、またよろめき、春蘭は反撃に移ることができない。

「お次は、大バサミだ。真っ二つになりたくなかったら、しゃがむことを勧めるよ」

「なっ……………くそっ!」

必殺を放つ、と宣告する。

影が鞭から大きな刃が二つに変化し、大きなハサミになった。

刃が開き、春蘭の身体を切断しようと閉じる。

少女はソレを紙一重で、尻餅をつくようにして回避に成功した。だが、まだまだ。

次の必殺を放った。

「えっ……………?」

「あれは……………っ!」

「ボクの『岩打武反魔』だっ!??」

「違う!これは『トゲトゲわんわん』だ!」

「なんだ、そのちよっと可愛い名はっ!??」

と、見当違いなツッコミを入れる春蘭。

巨大な影の球体にトゲトゲしたモノが、彼女を踏み潰そうと勢いよく振り下ろされた。

格好とか気にせず、醜態を晒してでも必死に横に転がり回避した。

少女をゾツとさせた。

重量もそここのようので、地面にはちょっとしたクレータができ  
てしまっていた。

「き、貴様！わ、わたしを本気で殺す気がっ！！」

「いや、ちゃんと加減してるじゃん。さっきから、ずっと」

「なっ……………！？」

「あ、あれで……………本気じゃ、ない」

誰かがそう呟く。

距離を置いて観戦していた少女達は驚愕した。

春蘭は仮にも華琳の右腕で魏の最強武将だ。

雑魚ではない。

だが、実際にはどうだ。

御神の攻撃に反撃をするチャンスを作れないでいる。

ただ成すがままに、弄られ叩かれ追い詰められていく。

それは卑怯で、変則で、変幻自在に操る影に翻弄されるだけで、

あまりに一方的な戦いだった。

「しゅ、春蘭さま……………頑張って」

季衣が少女の名を口にし、祈るように手を組んだ。

「季衣。お前……………っ！？」

「だから余所見は駄目だって」

「……………くそっ！」

御神の強襲は春蘭をじりじり追い詰めていく。

こんなはずではなかった……………春蘭は歯噛みした。

慕ってくれている少女、そして敬愛する王の前で醜態を晒してし

まったのだから。

だからこそ、ここで負けるわけにはいかない。

少女の闘志が燃え上がった。

「侮っていた……………だが、遊びはここまでだ！御神！」

「な……………っ！？」

春蘭の纏っていた雰囲気が変わる。

本気の一振り。

空をも斬り裂く一振りに、御神は初めて押し負かされた。体制を崩す。

立ち位置が逆転する。

そして、もう一振りと少年を襲った。

「ちっ……重たすぎる。このバケモノめ」

「バケモノにバケモノ呼ばわりされる筋合いはない！はあああああああああ！」

「ぐっ……」

影で防御しているのに、力を行使しているにも関わらずの、重たすぎるほどの猛攻だった。

御神の表情から余裕が消えた。

反撃の隙を窺うが、防御するだけで精一杯だった。

「……さすがは曹操の右腕だ」

「私を見くびるなよ、御神……うおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオ！」  
確かに春蘭を見くびっていたのかもしれない。

鬼神だ。

御神はそう思った。

その猛攻に少年の表情が歪みだす。

だが、

「ふん。俺は勝利に貪欲なんだ。勝つためなら手段は選ばん。人影ドッベルマン」

「……」

『……（応）』

人影を出現させて、春蘭に突進させた。

「くっ……二対一とは卑怯だぞ！？」

「卑怯。それは最高の褒め言葉だな！」

「ちい……小癩なああああああああ！」

ズパアアアン！と、縦一閃。

人影ドッベルマンが真つ二つになって、後方に斬り捨てた。

「敵が増えれば減らすまで！何人増えようが関係ない、これでわた

しの勝ちだ！」

無防備になつた御神に向かつて駆け出す。

「獲物である『七星餓狼』を構えて走り出した。しかし……」

ピンチであるはずの少年がニヤリと笑う。

「……っ！？姉者、後ろだ！！」

「なっ……！！？」

「おいおい、外野は黙つてろつての」

秋蘭はそれを逸早く察しては春蘭に告げる。

御神はため息を吐き、外野に悪態をついた。

少女は危険を察知し後ろを振り向き、獲物で少年の攻撃を防御した。

「……（復）」

「何故だ……っ！？」

縦に真つ二つになつたはずの人影が元通りトッヘルメンになっていた。

「……（活）」

「お前は知らなかつたっけ？そいつは俺が倒れるまで半永久的に動くんだよ。だから斬つた程度じゃ死ぬことはない……それにしても、敵を目前にして背後を見せるとは良い心掛けだ」

「しまった………くそっ。なんだ、これは………身体が動かない！？」

御神が春蘭の懐にまで近づいていた。

ただ、少年は少女に触れていない。

ただ、そこにいるだけだ。

しかし、春蘭は身体を動かさないでいる。

「チェックメイトだ」

「き、貴様………わたしに何をした！？」

「これは『影踏み』といって、相手の影を踏むことによつて動きを封じ込めることができる、金縛りみたいな技だよ」

「な、なんだ、それは！くそっ………わたしはもう、動けないのか！」



「俺がお前の影を意図的に踏んでいる限りはな」

「なんだ、そのデタラメな力は……このバケモノめ」

「まあ、俺も正直この力には気味が悪いと思っっているさ……それよりどうする。まだ、続きをするというなら……えっちいことをしてやるつか？」

御神は恐怖を煽り身体を寄せては、少女の髪、頬、首筋と順に、イヤらしく撫でていく。

春蘭は悲鳴を漏らしかけたが、なんとか喉の奥で止めることができた。

しかし、悟った。

ここからの逆転劇はもはや皆無だという事を。自分にこの金縛りを抗う術は無いことを悟る。

だから、告げた。

「くそう……参った、降参する。わたしの負けだ」

「……まさか、あの春蘭に勝つとはね」

敗北を認め、力無くそう告げるのであった。

勝者、御神リョーマ。

試合が終了し、御神と春蘭に駆け寄る少女達。

「姉者、惜しかったな」

「秋蘭……ああ、でも次はわたしが勝つさ」

「うむ。それでこそ我が姉者だ。そして、御神もあの姉者を相手に良い勝負をしてくれた」

「良い勝負とは言えないんじゃないかな？俺、結構卑怯な手を使っただぞ？」

「ふふ。まあそうだが……だが、良い勝負だったのには変わらないさ」

「そ、そうかな…………… / / /」

「うん。春蘭さまも兄ちゃん、凄くカッコ良かったよ！」

「季衣、お前……………」

「ありがとうな、季衣」

と、賞賛を称える秋蘭と季衣に照れる少年と少女。

しかし、

「あなた、あそこまで頑張った春蘭に勝たせてあげなさいよ」

という桂花の一言から、

「そやで、隊長。なんで、自分が頑張ったん？空気読まんかい」

「隊長は卑怯なの。そして、大人げないのー」

「隊長。お疲れさまでした……………そして、卑怯この上ない勝利でした

ね」

「……………」

と、散々な言われようだった。

自分の部下に賞賛されず、もう御神の心は崩れそうだった。

まあ、少女達は少年の力を、黄巾党討伐時に間近でよく見ているからこそ、この回答だったのだと思いたい。

「リョーマ。あなたの実力、しかとこの目で見させてもらったわ」

「華琳……………」

「か、華琳さま……………申し訳ありません。力及ばず、このような醜態を晒してしまって……………」

「ふふ、そんな事ないわ。春欄も良くやってくれたわ。お疲れ様でした」

「か、華琳さま…………… / / /」

と、春蘭のニヤケっぷりがキモかったのでここでの描写は割愛だ。

「ただアレだけじゃ、あなたの影がどういったものか判断しかねないわ。ちゃんと、皆に分かるように説明してくれるかしら？」

「そうだな。ちゃんと説明するよ」

御神は影シニヤウの特性を説明した。

『その一 影を身体に纏って力や早さを補うことができる』

その二 影を具現化して、剣や盾に変換させることができる

その三 人影ドッセルマンという独自の意思を持った、人の形した影に命令することができる

その四 『影踏み』という相手の影を踏み、動きを封じ込める事ができる

その五 『憤怒ラース』の力を用いて、怒りで魔術的要素に変換し、力を爆発的に高める事ができる』

と、簡単な説明が終わった。

ただ、影シャドウの誕生秘話や、ソレの正体などはややこしくなるので伏せてだが……『憤怒ラース』までの大体のことは説明した。

「要は、攻守共に優れていえ臨機応変に七変化に行使できるってことだ……お分かり？」

「そう、分かったわ。で、次は誰がリョーマの相手になってくれるのかしら？」

「は？ちよ、待て、華琳。まだやる気か！？俺、疲れたんだけど！」「あなたに拒否権はないわ。よくも、私の可愛い春蘭を苛めてくれたわね。仕返しをしてあげるわ」

「なっ……根に持ってやがったか！」

「ふふっ、嘘よ、ウソ……まあ、でも、今の説明を踏まえて、もう

一度試合を観て分析してみないといけないの」

何がどうイケないのかは説明してはくれないが……

「リヨーマ、お願い……もう一度、戦ってくれるよね？」

「うっ……この確信犯め。そんな目で見るなよ、断れないじゃないか。分かったよ、闘つてやるよ」

男なら誰でも一撃で堕ちるであろう華琳の上目遣いに、御神も例外なく堕ちた。

そして……

「ふふ、ありがと……じゃあ、秋蘭。準備して」

「御意」

「で、その次に季衣ね。で、さらに真桜、紗和、凧と休憩無しで行くわよ」

「……御意っ！」「」「」

「おい！やっぱり、根に持ってんじゃねえか！」

と、御神の叫びも虚しく、少年は昼を過ぎる頃まで、少女達との試合をするハメに。

いや、あれは試合という名のイジメ……だったような気がしたのも無きにしも非ずだ。

もちろん、最後は凧にボコボコにされて御神の体力と精神ゲージはゼロになったとき。

すみません

タイトル、ふざけましたorz

スーパーマリオRPGが懐かしいです

たぶんクツパの武器で『トゲトゲワンワン』ってやつがあったような気がする

ボス戦のBGMが好きでした

ピーチのフライパン攻撃が衝撃的だった

あのマシユマロみたいなキャラが役に立った覚えが無い

なんか途中で猫のオバケに食べられなかったっけ？

ジーノカッター9999が出た時はテンションMAXだった

ヒゲは……何も思いつかないや

あと、ケーキのボスのあのロウソクがウザかったのを覚えている

結婚式場？でのバトル

ロウソクの火を全部消さないといけないのだが、

消しても消しても、また火が点いて中々倒せなかった

んで、しょうへい君(仮)はキレてスーフアミにコントローラーを

叩きつけてデータがぶっ飛んだ思い出が懐かしい

自分の中では小学時代のベスト3に入っています

リメイクされないかな

というわけで、

今回はちよつとした日常編？です

御神の影の説明は春蘭との戦闘描写のせいで作者の気力が尽きて簡単にまとめました



05・犯罪の匂いがしますわ〜Diary of the afternoon

注意

変態じじい注意下さい

前回の続き。

少女達との試合（イジメもしくはリンチと表現した方が良い）で、体力と精神をゼロにまで減らされた御神。

春蘭とのバトルを終えた時点、体力ゲージは半分はなくなったか。さらに、その次の秋蘭や季衣と二戦、三戦で体力は激減し、真桜や紗和には少年の心を決る精神攻撃で追い詰めていき……最後の試合では、消耗しきっている少年に一切の手加減もしなかった風。

隊長のその腐った性格を叩き直してあげます、と冗談抜きで叩かれることになった。

他の少女達とは違い彼女は『氣』を使えるらしくて、『猛虎蹴撃』とか必殺技よろしくサッカーボールを蹴るように『氣弾』を放ち、弱まりきった少年をKOした。

それを観ていた少女達は、容赦のない一撃に顔を引きつらせていたりで、華琳も少し苛めすぎたかしら、と冷や汗ものだった。

まあ、今日は少年の奮闘を称え、影のデータも取れたということ、それに免じて午後は休養に専念するようにと、街の警備はお休みにさせてもらうことになったのだが……

風が申しわけなそうに謝ってきて、

「今日の昼飯は私が奢ります」

と、彼女の行き着けの店に行くことになった。

ただ、紗和と真桜はニヤリと笑い風にか耳打ちしては、お二人の仲を邪魔しちや悪いということまで退散した。

何故、風は張り切っているのだろう……御神はあの子悪魔二人に悪態をつき、少女の後を付いて行った。

そして、風行き着けの店にてオススメ料理が二人前出された。

「……………」

その品に言葉を失くす少年。





今日は厄日だな、そう思う少年は城内を散歩している。

食後の軽い運動がてら誰か話し相手を捜しているのだが、一向に誰とも会わずに肩を落とす。

退屈だ。

その一言に限る今日この頃、やはり街の警備でもしようかなと思ったりもしなくもないのだが、

「お〜い、兄ちゃん!」

ふと、中庭の方から声を掛けられ、そちらに目をやると季衣がいた。

我が麗しき妹が手を振っている(御神目線)。

妹属性を発動……いや、話し相手にと御神は少女の方へ足を進めていく。

「やあ、季衣。さっきはよくもやってくれたな。おかげで酷い目にあつたよ」

「ご、ごめんね、兄ちゃん。ボクのせいで、痛い思いをさせてしまつて……怪我、まだ痛むの?」

「……………」

いらんこと言つてもうた。

心配そうに自分を見つめる少女になんか罪悪感が半端ない。

こんな無垢な少女になんて酷い挨拶をしてしまったんだろう、と心を痛めた。

「あ、ああ、もう大丈夫だよ。心配してくれてありがとうな。そして、お前だけだよ、俺の心を癒す天使は<sup>エンジェル</sup>」

「え、えんじえ……どういう意味?」

「ははっ、とつても可愛い妹つてことだよ」

「えへへー。ありがとうノノ」

天使〃妹……

御神の辞書の大体は『妹』で成立するのだろう。

そんな少年は季衣の頭を撫でたのだが、もの凄く鼻の下が伸びていて危ないヒトになっている。

偶然、廊下を通りかかった侍女二人が中庭の光景を、御神を見てはヒソヒソと袖を口に宛てて話している。

『犯罪の匂いがプンプンしますね。見てください、あの顔、あのニヤケっぷり。曹操さま達に伝えた方が良いでしょう？』

『そうですね。許緒さまが羨ましい……いえ、許緒さまの身が危険ですわ。確か、食堂には夏侯惇さまと夏侯淵さまがいらしたはずでわ』

『ああ、そう言えば、遅めの昼食をお取りになってましたね。では、すぐにでも……』

『ええ、報告に向かいますようか』

その場から早歩きで立ち去る侍女Aと侍女B。

しかし、御神は今のやり取りなど眼中になく、少女に夢中になっている。

「くすぐつたいよー。兄ちゃん」

と、季衣とのスキンシップを……否、一歩手前の犯罪行為をひたすら続けていた。

頬を撫で、顎や耳をくすぐり、

「ちょ、ちよつと、兄ちゃん？」

「ふっはっはっは……もう、離さないぞ〜」

後ろに回りこんでは抱きしめた。

あまり抵抗しない少女をいいことに、やりたい放題する御神。

まあ、季衣はスキンシップ程度にしか思っていないから抵抗しないのだが、それでも犯罪は犯罪だ。

ギョ〜ってしたり、頬擦りしたり、耳に息を吹きかけたりしたり、ほっぺにキスしたり……もう死刑確定したな、この男。

「に、兄ちゃん……くすぐつたいし、誰かに見られたら恥ずかしいよお／＼／」

「じゃあ、お兄ちゃんのお部屋で続きをするかい？」

「え〜と、その方が……良いかな」

「ははっ、嬉しいこと言ってくれるな〜。でも、まあ続きは季衣が

大人になってからな」

「にゃ？それってどういう意味？」

哀れにもこの男、これでも自分の中ではまだ自重しているらしい。季衣の問いかけに「それは、な・い・しよ」と耳元で囁く変態。イジワルしないで教えてよ、と身体を揺らすが……

それ以上は止めるんだ、季衣！お兄ちゃんを本物の変態にする気か！？と、御神はぐつと理性を堪え、我慢してはポーカーフェイスを装った（いや、もうお前は立派な変態で犯罪者だ）。

「まあ、そんなことより今を楽しもうな。そう、今この甘いひと時を、お前と触れ合い過ぎたいんだ……」ってことで、もうちょっとこのままでいさせて」

「別にそれは良いんだけど、春蘭さまだけには見つかったら駄目だからね」

「あん？何でだよ？」

「実は兄ちゃんと二人きりになっちゃ、危ないから駄目だって言われているんだよ。何で危ないのかボクには分からないんだけどね。でも、春蘭さまに見つかったら、きつと怒られちゃうからやっぱりお部屋に行こうよ。そこでなら、誰にも見られないから、いっぱい甘えても大丈夫だよな」

「季衣。お前、春蘭にそんな事を言われていたのか……でも、安心しろ。もし、見つかったもお兄ちゃんがガツンと言ってやるから、そんなに心配しなくても大丈夫だ。春蘭は昼は兵達の調練でここを通る可能性は皆無だ。だから、俺たちの仲を邪魔する間の悪い奴とか………目前まで迫っていた！双子の片割れの赤鬼が手には獲物を持ってらっしゃる！？」

少女は「御神ー！貴様よくもー！」と叫びながら姿を現した。

午前の戦いの時よりも凄惨な形相で、鬼神以上のものを感じ取った二人。

「春蘭さま！？に、兄ちゃん離れて！」

「ぶへっ！？」

季衣は慌てて御神を振りほどこうとした。

あまりの怪力に常人では対処できず、突き飛ばされ、二・三回地面を転げ周り仰向けになる。

ガチャリ、と鋭利な刃が少年の首筋を捉えた。

「……………」

赤鬼と目が合った。

テヘッ って言おうか迷ったが言わなくて正解だ。

「あ、あの、春蘭さま……………」

「季衣は黙ってる」

もう、弁明の余地もなさそうだ。

あとからやって来た秋蘭に季衣は保護？された。

「貴様、覚悟はできておるのだろうな！」

「御神。我々よりも先に季衣に手を出すとはな……………ふふつ。嫉妬してしまっではないか」

「しゅ、秋蘭さんが春蘭のストッパー役にならないと誰が止めるんですか？」

「すとおっぱーというのはよくわからないが、今のこの状況では姉者を止める必要なんてないだろう？」

「その下衆を見る目で見ないで！」

「うるさいぞ、御神。そして、言い残すことはあるか？」

「で、できれば、斬首じゃなくてお尻百叩きの刑でご勘弁を……………」  
春蘭にガツンと言うんじゃないかったのか？

そう思った季衣だったが、言葉を心の内に閉まっておいたのが吉だ。

「却下だ、そんなもの！そして、今すぐ死ねっ！」

「ちょ、待てっ！早まるなって！」

「問答無用！」

「ぎゃああああアアア！」

獲物を振りかぶる春蘭。

制止に掛けるが、もう既に時遅し。

御神は身体を反転させてはソレを回避し、起き上がりては逃げ出  
した。

影で迎え撃つ、という選択しは今の状況では考えられるほど余裕  
がなかった。

そして、赤鬼あかおにに追いかけられるハメに……中庭が城内、そして御  
神はボロボロになった。

その日の夕方。

華琳自室にて……

「あなた、休養の意味を分かっているのかしら？」

「……すみません。分かっているつもりです」

昼の騒動で、華琳の説教を受けるハメになった御神と春蘭。

二人は別々に……今の春蘭と一緒の檻に閉じ込めたら、確実に御  
神は死ぬる可能性があるという事で、時間をずらしてのお説教を受  
けていた。

斬首は避けられたものの、見事にフルボッコされた少年の姿は痛

々しいものがあり、

「はあ……」

華琳はため息をつくだけ。

もう、怒る気力も失せたのだろう。

「まあ、良いわ。春欄にも非があるわけだし、今回の騒動の件は不問にしましょう」

「おお、流石は華琳。ありがとう！」

と、中庭や城内を荒らしたことについてお咎めなし、と少女にしては珍しい処置だった。

気前の良い奴だ、と心の中で盆踊りが開催されたが、

「ただし。それは中庭と城内を荒らし回った件についてよ」

「ど、どういうこと？」

やはり、都合の良いようには動いていないのが世の中というやつだ。

華琳の表情が下衆を見るような目が変わったような気がした。

否、気がしたではなく下衆を見る目になった、だ

「リョーマ。私の大事な季衣に手を出したそうね？」

「……………」

「前から危ない子だとは思っていたのだけど、ついに本性を現したってワケね」

「仰られてる意味が分かりかねませんが……このわたくしめにどのような罰を与えるつもりですか？」

「そうね……今晚、私の閨の相手を」

「却下！」

「ちよつと、まだ途中までしか言っていないのだけれど」

「悪いな華琳。俺には大切な恋人がいるんだ。だから、そういう関係は持てないんだよ」

「そう、あなたには大切な想い人がいるのね……………で、恋人がいるのにも関わらず、他の女に、それもまだ幼き少女に手を出したと……………ふむ。死刑ものだわ」

「うぐ……………」

痛いところを突かれた。

言い訳の材料を探すが、よくよく冷静に客観的に自分のした行動を思い返してみると、反論の余地もない。

自分とはんだ変態さんだ、ということは今更ながら気付く。

今の御神の表情はどうなっているのだろうか。

それを知るのはただ一人、目の前の寝台に腰を掛けた華琳だけだ。少年のその表情を見てどう思っているのだろうか……

「ねえ、リヨーマ」

「なに??」

華琳はあまりにも滑稽で哀れだけれども、それが可愛く狂おしいほどにも愛らしく見えた（こっちも相当レベルの高い変態さんだが）少年に声を掛けた。

ポーカーフェイスを装い、笑いを必死に堪え、震える声と唇を抑え訊ねる。

「あなた、最近寝不足みたいね？」

「……まあ、誰かさんの夜襲のおかげでな」

ウンザリした表情を見せる御神。

夜襲。

よく、寝込みを襲う者がいるらしい。

暗殺者、という訳ではなく、実は身近にいる人物が襲ってくる訳だったりするのだが……

夜遣いではなく夜襲？

少女はその言葉に引つ掛かりを覚えながら、また訊ねた。

「そう。夜襲、ねえ……今晚も仕掛けてくるのかしら？」

「たぶん……だがしかし、今日は漢文の勉強をしようと思ってるから起きてます。残念だったな、華琳」

「……いや、なんで私がなのよ？」

「あん？お前が桂花を差し向けてるんじゃないのかよ？んで、もう襲わないようにしてあげるから閨の共をなさい、とか言いそうだも



んな」

「……………なんで、そういう頭の回転は速いのかしら？まあ、そう告げるつもりだったけど……………で、でも、私の差し金じゃないのよ。残念ながら」

本当に残念そうにする華琳。

共犯っていう訳じゃないらしいが、誰が御神の部屋に忍び込んでいるか、という情報ぐらいは掴んでいるようだが……………その問題を放置していたらしい。

少年はそれを聞き、引きつった表情をした。

「じゃあ……………アレはあいつ一人の暴走かよ。ってか、あいつって軍師だよな？賢いはずだよな？」

「それはそうでしょ。私の部下を愚弄する気？」

「だってえ。あいつ、俺のナニを切り取ったら本物の女になれる、って本気で思ってたやがるんだぞ……………『今日こそはその汚らしいブツを切り取ってやるわ。そうすればあなたの胸も膨らむでしょう？そして、私の子をあなたが産むのよ』とか意味不明なことを耳元で囁くんだ。マジ半端ねえよ、あいつ」

「……………」

啞然。

言葉を失いフリーズした華琳にいろいろと愚痴を零す御神。

「ナニを切り落として胸が膨らむってどんな理屈だ？……………俺がどうやって子を産むんだ？いや、桂花が俺の子を産むんなら話は分かるけどな……………っていうか、あいつ本当にバカでさ、さつさとナニを切り落とせばいいのに最後のお楽しみに取っておいてるらしく、いろいろえつちいことを試してくるんだよ。耳たぶがふやけるまでしゃぶられたり、とかな……………で、俺が起きては未遂で済んでるんだけどいろいろと下品なことを次から次へとよくもまあここまで吐き出せたもんだ、と賞賛してもいいんじゃないか。」

聞けば聞くほど、部下である猫耳フード少女の恐ろしさを垣間見た華琳であった。

「な、尚更、私の閨を相手なさい。そのご褒美として、今回の季衣に手を出した件については帳消しにしてあげるし、桂花の件についても解決策を考えてあげるわ」

「いや、そこは無償で考えるよ……本当に理解に苦しむんだけど、桂花といい俺のどこが良いの？」

「女顔」

「思っていた通りにビンゴ！そして、一番聞きたくなかった言葉だよー！」

結局は男でありながら少女のような容姿をしているから、と御神が一番嫌う理由だ。

だが、そのおかげで男嫌いであるはずの桂花の少年に対する風当たりが弱いのは事実である。

あとは、ナニを切り落とそうなどという恐ろしい思考を止めてくれれば、いろいろと良い方向に持っていけれそうだ。

御神で慣れさせ男の免疫を付けければ、軍では兵士達との信頼関係とか築き上げられ、さらにより良く連携とかも取れるんじゃないか、と華琳は打算したり。

まあ、自分と桂花と御神の三人でえっちなことをしようなどと如何わしい妄想が大半を占めるのであるのだが……

「私も忙しい身なの。一応、桂花には注意だけはしといてあげるけど……それでも駄目だった場合は」

「……自分でなんとかするさ。お前にはもう頼まねえ」

「ふふつ。そう、良い心がけだね。何日堪えられるか見物ね」

「性格悪いぞ、お前……」

「なんとでも、どうぞ……まあ、何にしてもそのナニ。私の許可無しに切り離すことだけは許さないから。そこだけは肝に銘じておくように」

「ああ、お前に言われなくても分かっているよ」

季衣の件については保留で。

御神はそう言葉を吐いてはその場を後にした。

その日の夜。

御神は自室で漢文と睨めっこをしていたが、睡魔が襲ってきた。

それも、親玉級の強敵だった。

少年は抵抗してみせたが、もう、駄目のようだ。

「……………もう、無理。明日から頑張ればいいや」

明日野郎は馬鹿野郎、なのだが……

明日もまたハードな毎日が始まる、ということ。「まあ、今日は頑張った方だし良いだろう」と少年は自分に甘い採点を付けて、眠りに就くのであった。

そして……

「くっくっく。やっと寝たわね？」

御神が寝静まったところに奴がやってきた。

猫耳フードを被った軍師様がやってきた。

奴は御神の生活パターンを大体把握していた。

もう、ストーカー以外の何者でもないのだが……

一応、記しておくが、扉は朝方に春蘭に壊されて壁に立てかけてあるだけで、御神の部屋は廊下から丸見えであったりする。

奴は、そつと部屋に忍び入る。

忍び足で寝台に近づくと少女、もとい変態。

「はあはあ……今日こそ、今日こそは本当のあんたに生まれ変わらせてあげるわ……はあはあ」

「……………」

息づきが荒く、興奮気味のよう。

涎まで垂らしている。

そして、涎を拭いたその右手には包丁が……

いろいろツッコミたくなるのだが最後まで見守ろう。

「はあはあ……今回は一気にケリを着けてあげる。そして、その後に楽しみましょう」

同じ轍はもう踏まないと、舌舐めずりをした。

ギラリと光る鋭い目と研ぎ澄まされた包丁。

そして、ソレを逆手に持ち直し、

「ふふ、ふふふふ……さあ、行くわよ？御神」

勢い良く御神の布団を剥がし、獲物を振り上げる。

「否！明日からは御神お姉さまよ！」

丁寧に根元から切る取る、ではなく……乱雑に振り下ろした獲物をナニにブツ刺して機能を奪おうという行為。

どちらも男にとって激痛と恐怖の究極の二択でしかないのだが……余談として、どちらかを選べと言われた場合、作者は前者を選ぶだろう。

ブスツて刺されるより、スパツと切られた方がまだマシ……じゃないね。

で、振り下ろされた獲物が、グサツと不快な音を発して何の抵抗もなく勢い良く刺さった。

「よし！」

「……………」

手応え十分。

一寸の狂いも無し、と小さくガッツポーズを取るが……  
ここで異変に気付いた桂花。

それは、ナニが鋭利な刃物で刺されたというのに出血していなかつたこと。

それは、刺されたというのに、悲鳴やら呻き声、身悶え出すことさえなかつたこと。

人間の反応としてはおかしなことばかりだ。

だから、気付いた。

いや、気付くのが遅かつた。

そして、後悔した。

何故なら、ソイツは御神ではなかつたのだから。

ソイツは、少年の分身であり、影武者であり、盾であり、身代わりである人影ドッセルマンだつたのだから。

「あんたは……御神お姉さまじゃない!？」

「……(笑)」

作戦大成功。

人影は見事策に嵌つた少女を嘲笑い、手に持つ獲物を奪い取つた。

「しまつ……………!？」

少女が人影から包丁を奪い返そうとするが、所詮は軍師。

敵ではなかつた。

「キヤーーーーー……………ツ!??」

城内に響く悲鳴。

『お尻百叩きの刑』から始まり、『くすぐりの刑』に『逆さ吊りの刑』からの『影バンジー』と次々に、桂花は人影制裁を食らうハメになつた。

一方その頃、御神はどこにいるのかといつと……

「兄ちゃん。引っ付きすぎて寝にくいよ〜〜〜ノノノ」

「ふっはっはっは。いいではないか、いいではないか。今日だけ抱き枕させておくれ」

変態は季衣の部屋に夜遣い……いや、添い寝だがお忍びでやってきた少年（少女に桂花の襲撃の事を話したら快く了承してくれた）。

少女に他意は無いのだが犯罪の匂いが……

御神を信じよう。

ナニも起きないことを祈ろう。

そして、翌日。

人影制裁を受けて放心状態になった桂花と、御神×季衣（添い寝してるだけだが、第三者からにはもう御神が襲ってるようにしか見えない）の現場を発見されて、また騒動になったのはお約束である。

## 05・犯罪の匂いがしますわ〜Diary of the afternoon

変態丸出しでごめんなさい

たまにはこういう話も良いかなと、思った次第で少しエスカレートさせてみました

本当はもう少しエロくしたかったんですが、これでも自重しています  
御神リョーマをもっと変態にしたかった

桂花をもっと危ないヒトにしたかったな……十分なってるけど

そして、これにてちょっとした日常パートは終了

次話から黄巾党編後編？に入ります

それでは、さよなら〜

## 06・火の無い所に煙は出ない The outbreak of war

御神がこの世界へと舞い降りてきてから一ヶ月が経った。

しかし、黄巾党はまだ流行っているらしく、黄巾党討伐もウンザリし始めたある日のこと……

「はじめまして、俺は御神リョーマ。性別は『男』。好きなものは『妹』で趣味は『妹と戯れること』、将来の夢は曹操たちに『お兄ちゃん』と呼ばせてやるんだからな。楽しみにな！」

「……………」

華琳たちは冷たい目で少年を突き刺し、自己紹介を受けた人物達は啞然と少年を見ているだけ。

「隊長。自分、どんな自己紹介しとんねん」

「はあ。私達は楽しみになんかしてないわ……………春蘭」

「はっ。貴様はもう黙っている」

「おい、離せもがっ!？」

「……………」

春蘭に口を手で押さえられた御神。

まあ、少年が変態発言満載な自己紹介をした相手というのは、実はあの劉備や関羽であったりする。

日に日に増えていく黄巾党。

早急に討つべく、頭である張角がいると思われる、古ぼけた城を発見した華琳たち。

しかし、数が多すぎて自分達だけじゃ手に負えないということ、周辺の諸侯に声を掛けた。

「一緒に戦いませんか?と……………」

で、声を聞きつけやってきたのが、幽州の公孫賛とその客将である劉備であった。



劉備、関羽、張飛、諸葛亮、公孫贊、趙雲と全員が少女で、容姿やらは以下省略。

ああ、あとは劉備の所に降りた天の御遣いがいて、名は北郷一刀というらしいが……

『乱世に舞い降りる三人の天の御遣い。その者達が集つ時、乱世は終わり、太平の世が築かれるだろう』

ああ、なんかそういう噂もあつたりしたな。

華琳達から「ふくん、あなたがあの……へえ、そう」という冷たいコメントを貰つたり。

悲しきかな、御神という変態のせいで『天の御遣い＝変態』という構図が少女達の辞書に書き上げられてしまつていたのだ。

まあ、そんなことよりも、

「え」と……」

「ああ、アレは気にしないでちょうだい」

「……いいのか？」

「あの子達はいつもああだから」

御神と春蘭のやり取りにどうしたらいいのか分からない劉備一行スルーしろ、そう華琳は微笑んで訴えかける。

(いつも、ああなんだ……というか男の子?)

(どう見ても女にしか見えないんだけど……)

(み、御遣い様なのに、か、変わったお方もおられるのですね)

(ふむ。中々どうしての……私と通じるものがあるのは気のせいか)

(にゃ?お兄ちゃんの顔色が悪いのだ)

(はわわ)。とても、苦しそうにしていますよ)

(いや、誰か止めに入らないとヤバイぞ、あれ)

と、上から劉備、北郷、関羽、趙雲、張飛、諸葛亮、公孫贊と順にヒソヒソ話をしていく。

ギブギブ、と春蘭の腕をタップしては合図を送っているのだが届

かず、顔は血の気をなくし真っ青になる御神……

ソレを見かねた華琳は双子の妹に声を掛ける。

見苦しいからもう止めさせろ、と。

「姉者、鼻まで塞いでどうする。御神を窒息させるつもりか？」

「……ああ、そうだな」

なんの悪びれもなく、御神を解放した。

「んー……んー……ぶはっ！てめっ、おいこら春蘭！俺を息止めのギネス記録に挑戦させるつもりか！？」

「耳元で煩いぞ、御神。少しは空気を読んだらどうだ？」

「謝罪の一つもない！それに春蘭に空気を読めとか言われた！？明日は大吹雪だなこりゃ」

「な、貴様あ！わたしに対する評価は一体どうなっているんだ！？」

「ん？頼れそうもなく残念で馬鹿な妹の春蘭」

「……評価、酷っ！？」

少女に対する少年のあまりの評価の低さに劉備達は驚愕した。

一応、御神より春蘭の方が年上であることを記しておくが……

諸葛亮は、はわわーとか言っておろしている始末。

怒りに煮えたぎった春蘭は獲物を構えて吼える。

「き、貴様……もう許さん！今すぐその首を刎ねてやる！」

「ははっ、やれるものならやってみろ。返り討ちにしてやんよ！」

御神も少しお怒りのようで、バリバリと影を剣の形を成しては威嚇した。

まあ、ここで御神が普通の人間じゃないことが証明されたわけだが（いろんな意味で）……

「姉者、落ち着け……御神もその辺までにしとけ。見苦しいぞ」

「止めなさい、二人とも。あとで、お説教よ」

「春蘭さま。兄ちゃんも喧嘩しないでよ」

「隊長。ホンマこりんやつぢゃな」

「隊長。恥ずかしいですよ」

「まあ、これが隊長だから仕方がないの」

「ホント、煩い女二人組みね。御神は早くそのナニを切り落としたりいいのに」

「ガルルルツ！」

劉備達が御神に警戒する中、華琳達はいつものやり取りだ、とまた一つため息が重なった。

本当にバカね、と……

少女のお説教を受ける御神と春蘭でした。

天幕の中。

テーブル越しの三人に話し掛けた華琳。

「とはあれ。公孫賛に北郷一刀、劉備。此度の黄巾党の討伐に協力してくれたことに感謝するわ」

御神と春蘭にお説教を終えた後の満面の笑みで話し掛けた。

春蘭は頭にたんこぶを作っていたが、もう一人は外で撃沈している。

劉備たちは引きずった笑顔で返し、

「ま、まあ、礼を言うのはこっちも同じだと思っぞ？」

「そ、そうだね。こちらこそ協力してくださって、ありがとうございます。だよな？ご主人様」

「あ、ああ。あんた達がいなければ俺達も兵の数でやられてたのは目に見えていたし、お互い様だよ」

ソレを見て、「そう」と微笑むだけの華琳。  
その微笑みが逆に怖い。

あれはだいが怒ってるな、そう思う面々だった。

「じゃあ、早速だけど軍議を始めようかしら」

皆、真剣な顔になった。

もう、おふざけの時間はお終いだというかのようになり、ここら辺の切り替えは流石と賞賛するべきだな。

御神もふらふらしながらだが、中に入ってきては席に座った。

「奴らの勢力は日に増す一方。ここは迅速に黄巾党の頭、張角を討つしかないのだけれど……」

「確か、張角って奴は妖術の使い手らしいな」

北郷がそう確認した。

皆、一斉に頷く辺り、そういう事になっているらしい。  
妖術使い。

三国無双にも登場するアレだ。

「確か、杖から炎やら突風を生み出すらしいですな」

「わたしは張角の分身が何人も現れたり、土を人の形にしたりもできると聞いたぞ」

「私は落雷の仕業もその者によるものと聞きましたが」

「ウチは人の心を操るって聞いたぞ」

「もしかしたら、無理やり戦わされている人達とかもいるかもしれないのー」

「そうだとすると厄介ですね」

「え〜と……でも、その噂って本当なのかな？」

「誰かが偽の情報を流したのかも知れないよな」

「確かに、そういう可能性もありますね……」

と、いろいろと意見が飛び交う中、華琳はまだ一言も発っしていない少年に訊ねた。

「ふむ。リヨーマはこれに対して、どう思う？」

「ん？ そうだな……火の無い所に煙は出ないってな。それに敵が妖術を使っても別に不思議でもなんでもないだろう？」

「あなたがその代表例みたいなものだしね」

「正確には俺の影は魔術だシャドウがな……まあ、アレだ。一番厄介なのが人心掌握やら精神汚染など精神系の類いだな。物理的な炎や風の攻撃よりタチが悪い。こっちが向こうの術に引つ掛かったりしたらシヤレにならんぞ」

「御神。それは、味方と戦う可能性も出てくる、そういうことか？」

「そういう可能性も無きにしも非ずだ」

「そんな……」

「まあ、あくまで可能性論での話しだけだな……」

いくら敵が烏合の衆の集まりであろうと、こうなれば戦況は最悪。味方の戦力が奪われ、尚且つ敵戦力の増強。

術式に嵌った味方と対峙すればそれだけで士気も低下。

こちらの指揮系統はめちゃぐちゃになるのは一目瞭然。

ただ、これはあくまで一つの可能性であること。

もしかしたら、張角には人心掌握などの妖術が使えないのかもしれないし、ヒトの心を操るより恐ろしいそれ以上の術式があってもおかしくないのだが、敢えてそれは口にしない。

これ以上の予測、詮索は限がなく、すべて無意味である。

だから、魔術師や能力者を相手する場合、相手の力がどういったものか分からない時は行使させてそれに対応する。

力が何なのか思考するよりもまずは戦ってみる。

否、敵が力を使う前に叩き潰せるのであったらそれに越したことはない。

とまあ、いろいろと考えるのが嫌なだけな、怠惰な持論だが……まあ、良い意味では春蘭タイプ（猪武者）、とでも言えば聞こえは良いはずだ。

「それと、これを見てほしい」

御神はどこから取り出したか分からない一枚の地図を出した。

「なんだ、これは？随分と古ぼけた地図だな」

「ここ周辺の地図のようですけど……」

「コレって倉庫に置いてあったやつよ。あんた、まさか許可無く勝手に持ち出してきたんでしょ！」

ズバリその通りであるが、少年はそれを鼻で笑うだけ。

バカにされたと思った（実際にバカにしたのだ）桂花はカアッと顔を真っ赤にさせたが、華琳がいちいち相手にするな、と制止を掛けた。

華琳LOVEな少女は冷静さを取り戻し、訊ねた。

「で、それが何？」

「ああ、ここなんだが、このマーク……この印って祭壇だよな？」

御神が指差した箇所には祭壇っぽい印が描かれていた。

張角が占拠する城の右側。

少し離れた山中にあった。

「ええ、そうね。私も知識程度だけど、これは確か『作物が恵むようにと天にお祈りする儀式』のために用いたものだったような気がするわ……でもコレは一昔前に行われていたものよ」

「で、それがどうかしたのか??」

「俺の『何かやべえセンサー』が反応しているんだ」

「御神よ。天の言葉が混じって分かりにくいのだが、ここに張角がいるとでも?」

「いるかもしれない、だ……もし、仮にいなくても大掛かりな魔術、いや妖術的な何か仕掛けがある場合、こういう儀式的なモノがあったりすると相場は決まってる、のはずだ……北郷君。RPGでもなんでもいいから、それに当て嵌めてみればなんとなく分かるだろう?」

「……ああ。でも、それはゲームだけの話だろ?」

「否。俺たちの世界の裏では普通に魔術は使われているぞ?まあ、この俺のこの影は特殊だな」

「……マジかよ」

「ごくり、と生唾を飲み込む北郷。

受け入れがたい真実だが……無理もない。

いきなり現代の裏では魔術は当たり前、と言われれば驚くだろう。

「ちよつと。二人だけにしか分からない会話をしないでくれるかしら……」

「じゃあ、なに、あなたは私達にここを攻めろというわけ？」

「いや、ここを攻めるのは御神隊だけで十分だ。華琳たちは城の攻

略に専念してくれ」

「……ふむ」

影を地図上に走らせシミュレーションしていく。

曹城 祭壇

劉公 御

城に曹と劉、公の文字が、祭壇の方に御の文字が進んで行く。

駒の影シヤドウを使った説明は皆に分かりやすく伝わっただろう。

ただ、その作戦に不満を漏らすものがいた。

それは、祭壇を攻める御神隊の小隊長である三人の少女。

「隊長。ウチらだけで大丈夫なん？数が少なすぎるんとちゃうか？」

「今の御神隊の数は千なの。見栄っ張りはいくはないよ？」

「隊長。そこら辺の細かな作戦はどうなされるおつもりですか？」

「凧の闘志溢れる『氣』と紗和の持ち前の『明るさ』と真桜の諦めない『ト根性』と俺の妹に注ぐ『愛』があれば敵無しだ。向こうが

何千、何万人であろうと御神隊は永久に不滅さ」

「リヨーマ。今晚はご飯抜きね」

「何故につ！??」

「……………」

少年は割りとは本気で考えていたりするのだが……

もはや作戦でも何でもない。

もう、ため息しか出ない面々。

「痛い！その下衆を見下すような視線に最近慣れてきたけどやっぱり痛いものは痛い！」

「……………」

この軍議、少年の発言権はここで終了した。

まあ、約一名が大人しくなったところで……

張角の妖術にいつて、考えても埒が明かないということと一旦保留という形に。

で、作戦だが先の通り、華琳・劉備・公孫贇の軍は黄巾党が拠点としている城を二方向から攻め込み、御神隊は祭壇に進攻していく手筈になった。

しかし、御神隊の隊長がアレでいろいろと心配な為に誰かも一部隊、将を付けることに。

始め、桂花は御神を悪ノリさせないために秋蘭を付けさせようとしたが（春蘭や季衣にくつつけるといっていると問題が起きるために却下）、華琳は劉備の将である関羽を付けさせることを薦めた。

これは表向きには少年の意識改革で……他諸侯の将と共闘するんだ。恥をかきたくなかったら真剣にやれ、と華琳の少年に対する愛である。

でも、本当の目的は……………

（ああ、関羽。なんて美しいのかしら。私はあなたが欲しい。だから、とりあえずリヨーマとくっ付けさせてフラグって言うのだったかしら？リヨーマと共に行動させれば、ナニかきつと起きるはず。



そうすれば少しでもフラグが立つでしょう。で、そういう機会を何度も作っていけば、あら不思議。見事、リヨーマに墮とされ私の配下になるって寸法よ……………そして、関羽はリヨーマと同時に私が美味しく頂いてあげるノノノ）  
などと、とても不穩で不埒で不可解なことを考えている変態さんだったりする。

もう、キャラ崩壊もいいところだ……

関羽はナニか背筋に悪寒を走らせるのだが、その原因がまさか曹操であるとはこの時点では思わない。

御神は華琳の微妙な変化に気付き、ナニかまた良からぬことを企んでいるな、と思ったりも無きにしも非ず。

劉備や北郷、諸葛亮はそれを快く承諾し、軍議はこれにて終了。少年少女達は各々の準備を取り掛かることになった。

御神隊は関羽隊と共に、本陣から少し離れた所にいた。

正規ルートじゃなく、一昔前に使われていたルートにて祭壇を目指すことに。

ここから先は、馬での移動は困難と、自分の足で移動するしかないようだ。

少年少女達は凹凸の激しい足場の悪い道を歩いていく。

「ふあ〜……あー、ねみい」

少年は大きな口を開けて欠伸をした。

そんな少年にジト目な視線を送る少女達。

「御神殿。戦前に欠伸は止めて頂きたい。部下達に伝染したらどうするおつもりですか？」

「そうですね、隊長。もう少し、緊張感というものを持ってもらいたいものですね」

「って、言われてるぞ？真桜。こんな時に欠伸なんかするなよ」

「隊長。ホンマ自分どついたらるか？何でこんな時に悪ふざけしだすん？」

「そうなの。華琳さまはそうさせないために関羽さん達を寄越してくださったに、これじゃあ意味がないの〜」

「ははっ、残念だったな。華琳の策にそうやすやす乗っかってたまるかってんだ」

「……」

そう、御神は薄々気付いていた。

華琳の関羽を見るあの目。

あれは、獲物を狙ったときの獣の目。

あれは、かつて恋人が少年を見るときの目にそっくりだった……

悲しきかな、こんな所で初夜の体験を思い出した御神。

(ああ、あの日のメモリアルが懐かしいぜ……………ぐすっ)

などと、心の中で呟いては、さめざめと泣くのであった。

「み、御神殿？」

「何で泣いてんのや？」

「た、隊長？」

「隊長。どうかしたの？お腹が痛いの？」

少女達は感情豊かな少年に翻弄されあたふたした。

少し言い過ぎたか、と何故か少女達が居た堪れない気持ちになる。で、先を進むと……

「ここは……」

「少し左に寄った方がよさそうだな」

「そのようですね……」

足を止める頷きあう少女達。

進行右側がちよつとした崖になっていて、そこから落ちれば死ぬだろう。

左側にズレ、兵士達に注意を呼びかけては進行を開始していく。

少し傾斜がきつくなってきたか。

まだ、祭壇まで距離があるようだが、弱音を吐いているわけにもいかない。

一昔前の道を使っているため、足場は相変わらず悪く……

「きゃっ」

と、関羽が足を躓かせるなんてことにもなったり。

ただ、バランスを崩し倒れかけた少女を支えたのが御神だった。

なに、この小イベント？

役得だ。

御神はそんなことを思ったりしながら、倒れかけてきた少女に声を掛けた。

「ふっ。お怪我はありませんでしたか？お嬢さん」

「あ、ありがとうございます。御神殿……わ、私は大丈夫ですが……」

御神スマイル発動。

紳士な対応に関羽もたじたじだ。

ただ、少女の笑顔は引きつっていた。

何故なら、

「まあ、足場が悪いから仕方がない事故だがな、今度からは気をつけような。じゃないと、ここがギャグパートじゃなかったら俺は即死確定だったよ」

「は、はい！……申し訳ありませんでした！」

御神の頭はザクツ、と関羽の獲物が刺さっていたから。

関羽さんは少年の姿に完全に引いている。

これがなかったらフラグ、完全立っていたな……

「隊長のボケは相変わらずベタやな」

「だね。その血はどうやって演出したもののなの？」

「いや、アレは本物の血だと思うのだが……た、隊長。大丈夫ですか？」

「全然大丈夫じゃねえよバカヤロー」

と、獲物を頭から抜き取り血を拭いては何事もなかったように返した。

まあ、これもまた一つのお約束であったり。

御神ご一行はさらに先へと進んでいく。

そして、祭壇の中間地点に差し掛かった所だった。

「そろそろ頃合か……」

そう、呟く御神。

と、それと同時に遠くの方で銅鑼が鳴った。

それは華琳たちの出撃の合図だ。

黄巾党と衝突する。

ただ、それは御神達とて例外でない。

「殺ス……コ、ロス……」

「オマエ、達ヲ……全員抹殺ス」

「死ネ……死ンデシマエ」

行く手を遮る黄巾党。

横合いからも姿を現した。

ただ、この賊党ら皆、目の焦点が合っていないかった。

「隊長。こやつ等……っ!?」

「ああ。どうやら、妖術の類いで操られているようだな」

「そんな!」

「やっぱし、ウチの噂はホンマもんやったか!」

「しかし、これでは手を出しようがない!罪無き者も紛れているか

も知れぬぞ！」

「だな。だったら、やるべき事は一つだけだ。さっさと突破して、張角を叩き潰すぞ」

「御意っ！」

「御神殿。あなた様の『武』、見定めさせてもらいますよ」

「ははっ。勝手にどうぞ……行くぞ、御神隊！目指すは祭壇で張角の首だ！」

「おおーーーーーっ！」「」「」「」  
始まった。

兵士達は雄たけびを上げ、衝突した。

曹・劉・公連合軍VS黄巾党の戦いの火蓋は切った。

やっぱり、御神以外の天の御遣いはいらなかったな

北郷一刀のせいで『御神×関羽』がしにくいではないかorz

<sup>ホウ</sup>？統でしたっけ？

雛里ちゃんでしたっけ？

キャラが増えて、描写めんどくさいから消去しました

少女は家でお留守番ということ……すみませんでしたorz  
いろいろ、ツッコミどころ満載です

なんでこんな設定にしたんだろう

でも、もうやり直したくないんです

だから、これで行きます

進めます

それでは、さようなら〜〜orz

## 07・カウント零 Marionette of the enemy

黄巾党を討伐するため、諸侯に呼びかけた華琳。

集まったのは公孫贇とその客将である劉備一行であった。

あと、天の御遣いである北郷一刀という人物だが、以下省略してもいい、どうでもいい情報だ。

共に黄巾党を討伐すること、作戦は至ってシンプル。

曹操、劉備、公孫贇の軍は張角が拠点としている城を攻める。

御神隊と関羽隊が城の外れにある祭壇を念の為に攻撃するのと。

銅鑼が鳴り、開戦の合図。

巻き上がる砂煙に兵士の雄たけびと交わる刃の音。

張角に操られる賊党達は次々と倒れていくのであった。

「はあああああああああ！！」

「グハッ!?!」

赤のチャイナドレスに身を包んだ黒髪少女は曹魏最強の武将だ。

なんの鍛錬も積んでいない敵は、成す術もなくただ斬り捨てられていくだけ。

少女の大剣がまた一閃する。

開始早々、百数という死体の山を築き上げていた。

流石は夏侯元讓なだけあって、その名は伊達じゃない。

「てりやあああああああ！！」

「グアッ!?!」

「ん?.....また、豪快に飛ばしおったな」

春蘭は足元に吹き飛んできた賊党を見下ろしてはそう呟いた。

ヒトを吹き飛ばすことができる人物は御神を除いた魏の将の中で限られており、春蘭か季衣か凧だけである。

で、ここにいるのは季衣と春蘭だけ。

季衣と呼ばれる少女はまだレッドランドセルを背負っててもおか

しくないお子様で、あの小柄な身体のどこにあんな力があるのか、謎に満ちていたりするのだが。

季衣は自分の獲物を振り回しては、春蘭をも超える敵の撃退数を築き上げていく。

まあ、あんなに饅頭やら団子を食べたら力も出るよな、と大食いでもある少女にそんな感想を抱きつつ、春蘭は次の標的を斬っては先に進んで行った。

「よし。この調子で行くぞ季衣！」

「はい。春蘭さま！」

ただ、この二人、一ヶ月前まではここまでの実力はなかった。

いや、一ヶ月前の実力も折り紙つきの猛将だったのだが、さらにパワーアップしてらっしゃるようで。

それは一重に御神の妹に対する愛……もとい、御神に暇な時間さえ見つければ勝負を挑んでは経験値をアップさせたのが原因だろう。御神という特異な相手に己の武を磨き上げた。

その成果がここにきて現れたようだ。

さらに敵を撃破数を量産していく二人。

「やはり、夏侯惇さまは最強だな」

「だな。しかし、許緒さまはさらに凄いな……敵がこっち降つてこないことを祈ろう」

「ああ……世の中つてやつぱすげえよな」

などと、少女達の活躍を見ては感想を漏らす兵士たち。

曹操軍の兵は精鋭部隊だ。

一人一人が他の諸侯の兵に比べものにならないくらい優秀だが、あの少女二人が傍にいるだけで彼等の実力は霞んでしまうものがある。

仮に開戦直後の兵士一人の黄巾党撃破数は54と表示させたら、春蘭の撃破数を405と大きく上回れてしまう。

悲しきかな、その所為で賞賛されることはまず無い。

まあ、これぐらいできて当たり前だ、と逆に冷たく突っぱねられ



るだろう。

だから、兵士たちも華琳から賞賛されたいがために必死になったりして、上手い事相乗効果というやつが生まれるのだ。

華琳というロリ属性にやられた兵士は必死に頑張る。でも、春蘭たちが凄すぎて褒めてくれない。だったら、もつと必死に頑張つて、絶対に褒美を貰うんだ！でも、やはり春蘭たちには敵わないや……と良い具合にループしたり。

ただ、この戦いは一筋縄ではいかなかった。

敵の頭が何者であるか、忘れてはいけない。

「っ！？季衣、危ない！！」

「え……っ！？」

春蘭は季衣の背後に迫った敵を斬り捨てた。間一髪の所だった。

安堵したがそれも束の間、少女達は目を疑うことになった。

ありえない。なんてことはありえない。

よく少年が使っていた台詞が少女達の脳裏に過ぎる。

でも、こんなことがありえていいのか、と背筋に悪寒を走らせた。

今さつき斬り捨てたばかりの敵が立ち上がりだしたのだ。

否、ソイツだけでない。

そこら辺に転がっていたはずの敵全てだ。

「な……こやつ等は先ほど斬り捨てた兵士達ではないか！？」

血を流しながら、よろめきながら、うめき声を上げなら立ち上がる黄巾党。

痛々しい切り傷を押さえようとせず、己の獲物を構えた。

「コ……………ロス」

「コ……………ロス。殺ス」

「コ……………殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス」

「な、何なのだ……一体」

再び襲ってくる敵。

先ほどまでの撃破数がゼロになった。

また、一からのやり直し。

だったら、また斬り捨てるまで、というかのようにまた、撃破数をカウントしていく。

しかし、

「こ、こやつら、不死身かっ!?!」

「しゅ、春蘭さま。こいつ等いくら倒しても起き上がってきますよ」

何度斬っても、何度ぶっ飛ばしても、敵は倒れてくれはしなかった。

また、這い上がってはソレを斬る。

また、迫ってきてはぶっ飛ばす……

その繰り返しだった。

「ひ、怯むな、季衣。起き上がってくるなら脚を叩き潰してやれ! 皆、重点的に脚を狙うんだ!」

「……お、お……!?!」

敵が立ち上がってくるなら、脚を斬り落として動きを止めてやればいい。

脚を斬り落としてもまだ動くなら、今度は両腕を斬り落として武器を使わせなければいい。

春蘭にしてはまともな策ではあったが……

ゾンビよろしく不気味にも立ち上がってくる敵に冷静な対処を実行できるのは全員ではない。

「こやつ等から生氣を感じられないですな……」

「張角め……死者を操ったとでもいつの?」

「華琳さま、意表を突かれ、こちらの被害ができました。兵士達の土気も落ちています!」

「早急に手を打たないと不味いわ……春蘭に季衣も苦戦しているよ  
うね」

あまりの恐怖に脅える者、逃げ出す者と心弱気者達には耐えきる

ことはできなかつたようだ。

ここ、春蘭たちから離れた本陣でも、似たような敵の攻撃に苦戦していた。

春蘭の双子の妹は弓矢で敵の目を射抜いていくが、まるで効果無し。

首、胴、両手、両足と射抜くがそれでも動きだす。

もうゾンビ以外の何者でもなく、兵士達の士気は激減。

猫耳フードを被った少女の言うとおり、自軍の被害は拡大していく一方であつた。

歯噛みする霸王。

開戦した直後の敵は正気を失っていた。

この時点で、最悪のシナリオは予想できていたのに……  
華琳は目前と迫る敵を睨むことしかできなかつた。

「星！劉備達が押されている！手を貸してやってくれ！」

「そうしたいのは山々ですが……このっ！」

「グハッ！？」

「ちっ……斬つても刺しても叩いても、次から次へと……きりが無い」

公孫贇に呼ばれた星と呼ばれる少女は趙雲。

敵に悪戦苦闘しているのはどこも同じで、彼女でさえこの敵の異様に飲み込まれつつあつた。

烏合の衆だと油断したのが仇になつたか……

少し自嘲気味になつてしまつたが、気持ちを切り替えた。

まずは目の前の敵を再起不能にして、劉備達の方へと向かつて行くのであつた。

「ちよ、これ、本当にヤバイぞ！」

黄巾党Aを斬り捨てた北郷一刀。

彼もある程度、剣術の心得というものがあるらしく、敵をばっさばっさ斬り倒していくのだが……

「ご、ご主人様……どうしよう?」

「愛紗と御神達に託すしかないだろ。俺達は自分のできることをするしかない」

北郷一刀にできること。

背後に庇った劉備と諸葛亮を守りながら敵をやっつける、という少年のレベルでは難易度の高いミッションを現在進行中である。

たぶん経験値は半端ねえぐらいに獲得していることだろう。

ちなみに、劉備にできることは兵士達の応援と微々たることしかできないでいる。

諸葛亮は北郷の背後から戦局を見据えて、指示を出した。

「鈴々ちゃんと陣形を汲んで、少しでもこの戦況を維持してください……噛んじゃった」

「にやにやにやにやー!突撃いいい!なのだー!!」

「……おおー……」

鈴々と呼ばれるお子様（張飛）は、己の獲物を振り回し愛馬ならぬ愛豚?に跨り敵を吹き飛ばしていく。

この子も季衣と同じパワータイプのようなが……

「……いや、鈴々。今は突撃したらダメなんだけど」

「にや?そうなのか?」

「ああ、そうだ……俺一人で桃香と朱里を守れるはずないだろう」

「にやっ!そうだったのだ!」

「……」

今、諸葛亮が出した指示は半分聞き流していたようだ。

まあ、毎度の事なのだから仕方がないのか、と諦め肩を落とす北郷一刀君であった。

場面は御神達に変わり、

「死者をも弄ぶとは……」

「これが、張角のやり方」

「……………気に入らねえな」

「ウチ、めっちゃ胸くそ悪いわ」

「隊長。どうしよう」

少年達も例外なく、ゾンビな敵に苦戦していた。

それに彼等の場合は華琳たちと違い、地形が最悪だった。

左手は森林、右手は崖で道の幅は最も広いところで30メートルぐらい。

足場が悪く、千人以上いる部隊にとって、このスペースでの戦闘は最悪だった。

「こいつら全員を相手するな。敵を怯ましたら上へ駆け上げれ！」

「どけっ、貴様ら！」

「……ギヤツ!?」「」

風の氣弾で敵を吹き飛ばす。

その隙に部下達を上を避難させては、スペースの配分を確保する。ただ、ここが最終決戦じゃない。

だから、体力の温存を考えていた面々はさらなる絶望に襲われる。

「な……………っ!？」

「う、そ……………だろ!？」

血の気が下がっていく。

恐怖で驚愕した者もいただろう。

御神達が見たもの。ソレは……………

一人、また一人と御神隊、関羽隊の兵にタツクルしては崖から一  
緒に落ちていった。

「ちょ……………アイツらってまだ生きてる奴とちゃうん!?!捨て身のつ  
もりかいな!！」

「おいおい。本当に何をしてるんだ……………ふざけるな!ヒトの命をな  
んだと思つてやがるんだ!張角!！」

「……………隊長」

「……………御神殿」

御神の咆哮。

目の前で、次々に道々にされ落ちていく部下達。

一人を助ければ、助けられなかった誰かが犠牲になった。

少年一人では助ける範囲もたかが知れている。

怒りのボルテージは上がりさえはするが、それは攻撃面にしか活  
用できない皮肉さがあった。

防御面において、誰かを守る……………

一人や二人なら守れただろう。

だが、数百、数千という味方を全てカバーできるワケがなく、無  
情にも部下達は次々と落ちて行く。

そして、敵が標的と定めたのは何も兵士達だけじゃなかった。

将だつて例外なく狙われた。

「隊長!関羽殿がつ!！」

「ちっ……………」

崖付近で苦戦する少女。

御神は舌打ちをし、なんとか横合いから敵を吹き飛ばして関羽を  
守ることに成功した。

敵は一人崖へと転落していく。

「た、助かりました。御神殿」

「礼は後ででいいから……なんとかして移動するぞ」

「は、はい……………／＼／＼」

「隊長！ええ雰囲気はあとにしいや！もういつちょ、来んで！！」

「……………っ！？」

敵の意地なのか、第二撃目が来る。

今度は数十の敵が一斉に御神、関羽を目掛けて突進してきた。

御神は関羽を庇い、敵の進攻を阻止したが……

「隊長！まだなの！」

紗和の声が届いた時にはもう遅かった。

標的を御神と関羽に変更した敵が数百、正面から、横から、真上から次々と襲ってきた。

凧は助けに行こうとするがそれも時既に遅し。

ギリギリまで追い込まれた二人に最後のトドメといわんばかりに、敵の集中砲火を浴びることに……

「あ……………ヤバッ」

「くっ……………」

防御に成功したのはいいが、足場の方が耐え切れなかったようだ。

最悪だ。

足場が崩れ、御神と関羽は奈落の底に急降下していく。

そして、大量の黄巾党がその後に降り注いだ。

「……………隊長……………！！……………」

少女達の叫びも虚しく、少年の姿は大量の敵に下敷きになってしまったせい確認することができない。

確認できたのは、辺り一面に散らばる黄と赤の地獄絵図だけだった。

膝から崩れ落ちる紗和。

そして、こみ上げてくる涙。

「そんな……………隊長が。関羽さんが……………」

自分に、もつと力があれば……………  
もつと、真面目に鍛錬をしていれば……………

そう思えば思うほど、紗和の視界は滲んで何も見えなくなった。

「こら、紗和！こんな時に泣き言をいいなや！隊長があれくらいで死んでたまるか！きつと関羽の姐さんも生きとる！」

「そうだ！あの隊長なら何の心配もいらぬ。だから、我々には他にやることあるだろ！」

「……………ぐすっ」

「メソメソしてもコイツらは止まらへんで！本当に止めたいんやつたら張角を倒すしかないんや！」

「華琳さま達も似たような戦況だろ。早く張角を討って一人でも多くの犠牲者を減らすぞ！」

「……………う、うん！」

凧達は、隊長があれくらいじゃ死なぬのは知っている。

だから心配はいらぬ。

それよりも、少年を信じている。

絶対に生きている、という……………それは確信にも近かった。

それよりもやることある。

この異常な賊党共を操っている、全ての元凶である張角を早急に討つこと。

だから、立ち止まるわけにはいかない、ということを知りながら彼女は知っていた。

紗和は袖で涙を拭い、立ち上がった。

目には再び強い意志が宿る。

「楽進さま！ここは我々に任せて先に進みください！」

御神隊の兵士Aがそう言った。

彼等も優秀だ。

自分達に何ができるのか、分かっているようだ。

「分かった。でも、無理はするなよ」



「あんたら、敵が減ったからって油断したらアカンで！」

「はっ！」「はっ！」

「凧ちゃん、真桜ちゃん。行こう！」

「ああ！」

己の役割を果たすため少女達は祭壇を目指し、駆け上がって行った。

そして……

「ここが……祭壇か」

「なんや、人っ子一人もおらへんで」

「とつても不気味なの〜」

少女達の目の前に姿を現した祭壇。

雰囲気のある石造りな祭壇だった。

やはり一昔前のものだったようで、古ぼけた印象があった。

周囲は先ほどの騒音が、兵士達の雄たけびさえ聞こえないほどの静けさだった。

「あそこ見て！階段があるの！」

「なんや、まだ上に行けんのかい」

「よし……行くか」

紗和は指差した先には、折り返した階段の上段がちらつと見えた。顔を見合わせては頷く。

回り込み、階段を駆け上がっていく。

「あ、いたでー！張角っぽい人やー！」

「本当にいたのー」

「……ただならぬ気配を身に纏っているな」

階段を上りきると、そこには一人、ポツンと空を見上げては佇んでいた。

少女達の声に反応した男はそちらの方へ振り向く。

まあ、容姿は三国無双のあの張角で……そこら辺の設定はどうでもいい。

彼がオツサンだということさえ認識してくれたらいいのだ。

そんなオツサンは顎のヒゲを擦りながら訊ねてきた。

「ん………君達は誰だい？」

「お前に名乗る名前なんかないわ！よくも、ウチらの隊長を崖から突き落としてくれたな！」

「そうなのー！黄巾党の張角、大人しくお縄につけななな！」

「アハハ、元気がいいなあ、君達は………だが、断らせてもらうよ」  
ウインクをしてみせる張角。

中年親父がその仕草を見るとキモイ以外の何者でもない。

うつ、と悪寒を走らせる風達。

生理的に受け付けない。

だが、怯みはしなかった。

それぞれ、戦闘体制に入る。

「なら、実力行使でねじ伏せるまでだ」

「そや、ウチら御神隊を相手にしたことを後悔さしたる！」

「覚悟するのー！」

「ふん、君達が彼の………OK。彼がここに来るまで君達で楽

しむとしようか」

不快で、人を苛立たせるその口調と声色。

まあ、そんなこと張角からしてみればどうでもいいのかも知れないが……

何処から取り出したか分からない杖を天高々と掲げた。

(なんだ、これは。これは氣？なのか……っ!?)

ビリリッ、と少女達の肌に刺激する。

得体の知れない何か……

「さあ、おいで。かわい子ちゃん達……僕がたっぷりと可愛がってあげるとしよう」

妖術使いと噂されている敵だ。

少女達の知らない未知なる術を行使するのは当然。

だが、それがどうした？と言わんばかりに少女達は立ち向かっていった。

全ての元凶を倒すため。一人でも多くの者を救うために……全ては少女達に委ねられた。

ここでの北郷一刀君の強さは一般兵より少し強いくらいですの  
のであしからず

アニメ版の鈴々つて豚に跨っていたような……？  
だから、あの子だけ豚に乗らせようと思ったり……

始まったばかりだけ戦闘描写……もうムリorz  
自分なりに頑張りました  
読みづらと思いますが見忍してください

たぶん、急いで書いたので誤字脱字が出てくると思いますが、  
それも堪忍して下さい

08・死んでも死にきれねえ〜He is a Magician〜(前書き)

注意

f f 零式にハマったせいで更新が遅れましたorz

08・死んでも死にきれねえ〜He is a magician〜

死をも厭わない操り人形の捨て身の強襲にて、御神と関羽は足場を崩して崖から落ち、トドメにへと次々と二人の上から降り注ぐ敵の猛襲。

完全に二人の姿は見えなくなり、崖下の辺り一面は黄と赤が入り混じった最悪な絵と変貌を遂げた。

だが、少年はこの程度の高さで、この程度の攻撃でくたばるわけがなかった。

着地時に影シヤドウを用いて衝撃を緩和し、下に関羽を庇い、四つん這いになりながら背中で何百という敵を受け止めた。

重圧に耐えながら、少年は言葉を絞り出し少女に訊ねた。

「関羽さん……怪我は無いか？」

「え、ええ。大丈夫……ですが、御神殿。あなた様の方が心配です」

「俺は大丈夫、だ……それよりも……さっさと、張角のクソ野郎をぶっ飛ばして……この戦いを、終わらせないとな」

「はい………／＼／＼」

関羽は下から覗くように御神の表情を窺った。

先のあのふざけていた時と同一人物なのか……？

そう疑ってしまいたくなるぐらいの変わり身でいて、それ故に見惚れてしまったのかもしれない。

自己紹介や軍議、移動の最中に見せたおふざけをする少年。

張角の外道で卑劣で悪魔のようなやり方に怒った少年。

自分を庇い全ての攻撃の盾になってくれた少年。

もう一度、思い返してみた。

すると、自身の頬が紅潮して熱くなっていくのが分かった。

耳もきつと赤くなっているだろう。

胸の鼓動が高まっていく。

（私はどうしたというのだ……こんな時に何なのだ、この気持ちは

……………?)

謎の精神状態に襲われる。

でも、少女は知っている。

この気持ちは何なのかを……

自分がお慕えるのは主である劉備と北郷一刀。

ただ、それはあくまで主君としての、だ。

でも、これは……と続きを考えた所で、頭を振った。

(そんなワケがあつていいのか……半日しかまだ経っていないというのにだぞ。この方に、その、ここここここ……いい、いや、落ち着くのだ関雲長！しつかりしろ！自分を保て！し、しかし、このきききききき気持ちは )

と、脳内で暴走し出すが、最後まで言い終えることはなかった。

否、最後まで言い終わる前に少年が言葉を遮ったのだ。

「うおおおおおおオオオオオツ！華琳達に『お兄ちゃん』と呼ばれる日が来るまで、死んでも死にきれねえっ！！」

「……………えっ？」

少年の願望。

それは極めて不純というか、妹達への下心……もとい、愛情。

聞こえは最悪で、フリーズする少女。

彼女へのフラグは立ったばかりなのだが、今この瞬間にへし折れた。

ただ、少年は少女の心情を察することはない。

ただただ、御神は怒りを積もらせ黄巾党の残骸を押し上げていく。

影をフル展開させ、螺旋を描くように吹き飛ばすイメージでだ。

四方八方に吹き飛ばす黄と赤。

自由になった身体を起こしては、少女に手を取り起き上がらせた。

そして、

「……………」

少女のジト目が少年を射抜く。

乙女の純情を弄びやがったな。さっきのトキメキを返せ、と訴え

かけるかのようだ。

少年は何故、少女がそんな目で見てくるのか理解できず訊ねた。

「な、何かな？ 関羽さん」

「いえ、何でもありません……それよりも、ありがとうございます。あなた様のおかげで大きな借りができてしまいましたね」

「借りだなんて、そんな棒読みで皮肉めいて言われてもなあ……あと、そんなに見つめないで。照れるじゃないか」

「……………」

痛い！ その視線がとても痛い！ と左胸に両手を押さえてリアクシヨンを取るバカがそこにいた。

「さ、さて。 おふざけはここまでにしようか……………」

「…………… 始めから真面目にやって頂きたかったものですね」

「ほ、本当にすみませんでした」

誠意の籠った土下座をしては反省の色を見せる少年に関羽はため息を吐いた。

もういいです。 気にしていませんから、と……………

御神はソレを違う意味で解釈をしてしまう。

やはり少女の心情を察することはできず、だ。

「それにしても…………… 酷いものですね」

「だな…………… 反吐が出るよ、ホントに」

血の臭いが充満していた。

周囲を見渡すと死体がたくさん転がっていた。

その死体は敵の賊党だけじゃない。

味方の兵士達も何百という単位で転がっていた。

歯噛みをするこしかできない。

悲痛な表情を作ることしかできなかった。

「…………… 殺ス…………… 殺ス、コロ…………… ス……………」

敵は死体に、肉塊に変わろうがお構いなしに動き出す。斬り捨てても、吹き飛ばしても、何度も何度も……………



脳天がイっていようが、首がへし折れようが、両腕が変な方向に向いていようが、心の臓が刺されようが、内臓が飛び出ていようが……胴体を支える二本の脚さえあれば何度でも動く。

「もう、ヤダ。こいつら、キライ。大っ嫌い」

「私だつて辛いのです。弱音を吐かないで下さい」

「え〜……でも、こいつらのせいで絶対に今日、夢に出るぞ?」

「うっ……」

嫌そうな顔をする関羽は心の中で少年の悪態をつく。

足元には無数の死体、さらに死した敵に囲まれ、空から敵と味方が降ってくる……

うん。トラウマ確定した。

「まあ、何でもいいけど……」

「……全然良くはないのですが」

「取り合えず、張角をソツコーで潰しに行く………しっかり掴まっ  
つてくれよ、関羽さん」

「え、御神殿!まだ、心の準備が!」

「そんな準備はいらん。武器と俺だけは手放すなよ?」

「俺だけは、て、手放すなとか、そんなノノノ………って、きゃあっ  
!?!」

ナニか勘違いしてないか?

御神はめんどくさそうにしては少女をの肩に担いで、影シヤツウの力を借りて跳躍する。

敵の頭から頭へと、遊具の丸太のように飛び移っていく。

集団の最後の頭を思いつきり踏んでは地面に着地し距離を作り……

「うわ、パンチラ………否、モロだ諸!もろパンだ!」

「あ、こらっ!どこ見てるんですかノノノ」

「痛っ!ちよ、体制が悪いんだから少しの間は我慢しろって……う  
わ、美脚にしてエロい太もも!」

「み、御神殿っ!だから、見ないでください!本当に怒りますよノ  
ノノ」

「痛い痛いっ！ふ、不可抗力だ！見えてしまうのは仕方がないだろ！」

「とか言いつつ思いつきり凝視するなーーーーっ／／／」

「ぐはっ！」

「……」

担ぎ方が悪かった。

進行方向と反対を向いた状態で担がれた少女。

風の抵抗を受けてスカートが捲れて下着と肉付きの良い太ももが露になった。

もう、残念の一言しかでない。そう。せつかくのシリアスなシーンも台無しにして……

まあ、いろんな意味でこの二人の距離は短くなったのではないだろうか……

御神はそこから最大の跳躍で崖を一気に登り、関羽と共に祭壇を目指すのであった。

風、紗和、真桜の目前には騒乱を起こした全ての元凶がいた。

人をヒトと思わぬ卑劣なやり方で部下の命さえ弄ぶ外道。  
御神隊の小隊長である少女三人は、黄巾党の頭を討つべく駆け出す。

一人は氣を行使して、一人は二本の剣を駆使して、一人は悪を貫く螺旋の槍を振るっては張角に迫っていくのであったが……

「なんや、このオツサン……ホンマに火い出しよったで！」

「ひ、火だけじゃないの……ひゃあ!？」

「くっ……ここまでとは。これが妖術!？」

「アハハ、ほら早く避けないと火傷しちゃうよ」

「くそっ、あかん！近づくとさえできへん！」

火の粉の熱さに身が引いた。

風の刃が頬を掠めていった。

氷の塊が頭上から降ってきた。

必死に躲すが、さらなる攻撃が次から次へと少女達に襲いかかった。

ただ、まともにソレを食らうことはなかった。

ただ、致命傷だけは絶対に負うことはなかった。

敵の攻撃は初見するものばかりで、対応するのも遅れがちにも関わらずだ。

掠りさえするが、間一髪のスレスレの所で攻撃を回避することができた。

なのに何故……と、少女達は思った。

だが、その疑問を解決するのに数十秒も掛からなかった。

ただ、敵に遊ばれている。

この状況下でそう思うのが妥当だった。

実力レベルの差があまりにあり過ぎた。

自分達が対処できる相手ではなかったということ。

その事実を知らされた少女達は苦い顔で齒噛みする。

そんな少女達を張角は、

「良いねえ。その表情がたまらない。サイコーにグツとだ！もっと

見せてくれ。」

などと興奮しては変態さを露にした。

だが、少女達にソレを反応する余裕がなかった。

必死に身を捻らせ、跳んだり、しゃがみ込み、転がったりしては  
躲し続けないといけない状況なのだから無理もない。

「くそつ、この妖術をなんとかしないと……」

張角の猛攻の打破策を見つけ出そうとする凧。

隙を窺おうとするが見つけられず、なら自ら作るうと氣を全身に  
纏い強行突破を図る。

しかし、

「ああ、君達の世界では妖術ってことになるんだっけ？」

「……………な、に？」

意味深なことを言い出したせいで、眉間にしわを寄せては足を止  
めてしまった。

そんな少女を見て張角は笑う。

裏の世界を知らない表の住人を嘲笑う。

「アハハ、まあ似たようなのかも知れないけど、これだけは言わせ  
てもらおうか……………これは魔術。『才能の無い者が才能のある者を嫉み  
生み出した』……………そして、それを行使しうる者が僕たち魔術師だよ  
」

異世界の法則を無理矢理現世界に適用し、様々な超常現象を引き  
起こす技術。

元々は何らかの『宗教的奇跡』や『原石』に対する羨望から開発  
されたものらしく、

『真の奇跡に人の手で追いつこうとすること』

『才能の無い人間がそれでも才能ある人間と対等になる為の技術』  
とも表現されている。

まあ、ここら辺で説明はどうでもいいので割愛させてもらい……

「魔術師やて……………？」

「隊長と同じことを言っているの……………どういう事？」

「アハハ、困惑しているその表情も良いねえ。エクセレントだ……まあ、君達に分かってもらおうなどと思っていないよ。それよりも僕と遊ぼう」

「……っ!?」「」

張角が何故、『君達の世界』と言ったのか、何故に『妖術』を『魔術』と訂正したのか……

少女達の疑問を解決する時間はなかった。

何故、隊長と同じようなことを言うのか理解できず、それを考える少しの猶予さえなかった。

「ほら……ビビツと君のハートにLOVE注入だ」

「……ぐあああああああ!?」「」

少女達の身体に電撃が駆け巡り、力無く倒れこんでしまった。

ただ、意識を手放すことさえ許されず……

舌なめずりをしては少女達に恐怖を煽る下衆野郎。

「アハハ、弱い者イジメってどうしてこんなに楽しいんだろう」

「……」「」

「ダメ!この衝動を抑えきれない!もう、滅茶苦茶に、ボロ雑巾のようにフルボッコしてやるよ」

「ぐふっ……ぐあああああああ!?」「」

張角は一番手前に倒れていた真桜に腹を思い切り踏んづけた。

加えてはグリグリと踏みにじり、ミシミシッとイヤな音が真桜の腹部から聞こえた。

「真桜ちゃん!」

「待てっ!紗和!迂闊に飛び出すなっ!」

真桜を助けに行くべく、紗和は力を振り絞り突撃する。

風の叫びも虚しく、少女は敵の魔術によって膝から崩れ落ちた。

「うぐっ……無念、なの……」

「紗和っ!」

「アハハ!さあ、あと残るのは君だけだ。君の勇姿を僕に見せておくれ」

「よくも、貴様ああああ！！これならどうだ！猛虎蹴撃！」

「グハッ」

張角の顔面に放たれた氣弾。

「はあはあ……………殺ったか？」

「ごほ、ごほっ……………ぐっ、首の骨がいったでえ」

「わ、私達の勝利なの……………？」

直撃と同時に爆せて血飛沫を上げる魔術師。

首が擦れ曲がっていて、明らかに即死確定なのだが……

ソレは風の攻撃を喰らって尚、踏みとどまっては倒れることはなかった。

死して尚、動く操り人形と同じように……

首が変な方向に向いていようが、大量に血を噴出そうがお構いなしにソレは動く。

「そん、な……………あ、ありえない」

「うそ……………やる？何んで動くんや……………こんな事があっていいんか？」

「うう……………死なないとか反則なの……………」

「アハハ、痛いじゃないか。君達」

風は膝を付いた。

三人は絶望した。

世の中甘くない。

いや、普通なら少女達の勝利だった。

だが、こいつは普通じゃない。

こいつを相手にして、世の中の常識が通用するはずがなかった。

ゴキゴキと不快な音を鳴らし、首を元通りに強引に戻しては嘲笑う。

「う〜ん。ちょっと早いけどもう飽きちゃった。だから可愛い子猫

ちゃん達、ここでさよならだ」

これで最後だ、と張角は告げた。

もう、抵抗する力さえない少女達。

次の一撃に死を悟り覚悟するしかなかった。

しかし、世の中自分の思い通りにならないのは敵とて同じであった。

「いんや、サヨナラするのはお前だよ。クソ野郎」

「……隊長っ!?!」

「ワ、ワオツ! 猛烈ううううウウウッ!?!」

突如、少女達と張角の間に割って入ってきた少年。

影を纏った、怒りを込めたその一撃に、張角は勢い良く吹き飛び階段を転げ落ちた。

「悪いな。ヒーローってのは遅れて駆けつけると相場が決まってるんだ。皆、無事か?」

背中越しの少女達に声を掛ける。

「本当に来るのが遅いの……でも、紗和は無事なの」

「まったくヒヤヒヤもんや……せやけど、ウチも無事やで」

「きつと、助けてくださると信じておりました。私も無事です」

「そうか……なら、さっさと張角にトドメを刺して終わりにするぞ」

「……御意っ!」

さあ、主役は揃った。

そして、

もう、この戦いが長引くことはなかった。

08・死んでも死にきれねえ〜He is a Magician〜（後書き）

すみません

最後の最後、だいぶと手を抜いています

途中までスラスラ書いていたのですが、「ビビッと君のハートにLOVE注入だ」辺りからスランプになってしまい……で、そこにff零式を購入してはそっちばかりやり込んで

……

レムたんカワういね〜

ごめんなさい、キモかったですね

ウザかったですね

でも、まだまだハマってるので次話の更新も遅くなります

ご了承下さいませorz



09・ストーリーカーにはご注意を〜This is greetings to

注意

現在進行形でスランプ中ですorz

「可愛い子猫ちゃん達、ここでさよならだ」

「いんや、サヨナラするのはお前だよ。クソ野郎」

「ワ、ワオツ！猛烈ううううウウウツ！？」

絶体絶命の大ピンチの最中、少女と張角の間に割り込んだ御神。影を纏った怒りの一撃を張角にぶつけた。

オレの妹達に手を出すな、と言うかのように……

張角は勢い良く吹き飛び、階段を転げ落ちた。

ただ、そのせいで、

「み、御神殿！こつちに飛ばさないでください！」

「あ、わりい……」

後からやってきた関羽に被害が出たようだ。

祭壇に向かう道中、少年の思春期に悩まされ、美脚やら下着を凝視され続け恥ずかしかったので強制的に少年の肩から降りたのはいいが、祭壇の階段を上ったらキモイおっさんが降ってきた。

とんだ災難だ。

キモイおっさんが降ってくるくらいなら、我慢してでも少年に担当された方が数倍マシ……

否、ずっと私を見ていて欲しかったノノなどと思っては、

（わ、私はまたその様な邪な考えを敵の目の前で……い、いかん、いかん！しっかりしろ、関雲長！）

と首を振り、少年に詰め寄っては照れ隠しの文句を放つ。

後から追いつく者の行路を考えたら分かるだろ。こつちに飛ばすな、とガミガミ言い出した。

それに対して御神はテキストに少女をあしらう。

まあ、そんな態度をするから少女が怒ってしまう原因になるのだが……

そんなやり取りを傍から見ている風達は、二人の距離が縮まっていたことに危惧したりと、もうこの場の空気がシリアスからギャグパートに移行しては誰も張角にはアウトオブ眼中だったりする。

「いやいや、なに、この仕打ち！？もつと注目しようよ、この僕をッ」

哀れなソイツは階段を這い上がってきた。

「ボスキャラを放っておいてソツチでお喋りとか……アハハ、本当に君は相変わらずだね」

「……」

張角はニヤリと笑い、口の端から流れる血をふき取った。

杖で身体を支えていないと立ってられないようで、どうやら奴の身体は限界のようだ。

まあ、御神の怒りの一撃をモロに喰らったのだ。

何の対策も施していなかった者が無傷でいられる筈がない。

ただ、ソイツは限界であるはずなのにも関わらず話を続ける。

それは不気味で、少女達に恐怖、嫌悪、焦燥を与えた。

「待っていたよ。御神リョーマ君」

「俺を待っていただと……？」

「アハハ、そだよ。君を待っていたんだよ。会つのは一ヶ月ぶりぐらいかな？我が元・部下にして最高の暇つぶし（オモチャ）」

「……なっ！？」

「何を言ってる……いや、まさかっ！??」

人を苛立たせる喋り方、大げさな手振り身振りをする奴は少年の記憶の中でただ一人。

自分と恋人の人生を狂わせた張本人で、一ヶ月前に再会しては殺し合いをして抹殺したはずだ。

確かにあの時、あの場所で殺した。

アレを忘れるな、と言われなくても嫌というほど目に焼き付けた光景。

恋人を手にかけたアイツに激怒しては消滅させたはず。

しかし、目の前いる張角と思われていた人物がアイツだという。ありえないなんてことはありえない、と散々言ってきたが……

「……………アレン＝マクダエル」

「やあ。相変わらず元気そうでナニよりだ」

苦痛な表情で齒噛みする少年。

拳を力強く握りしめすぎて、血が溢れ流れた。

「た、隊長が張角の元部下って……………一体どういうことやねん!」

「た、隊長! 隊長は天の御遣い様じゃなかったのー?」

これは当然の反応だと思っ。

張角の言葉に困惑した少女達だが問い詰めるも、今の御神は穏やかじゃない。

冷静さを保っているかのように思われたが、少女達の問いに答えられるほど心に余裕はなかった。

「……………説明は後でちゃんとするから、今は黙って俺の後ろに下がってろ」

「た、いちよう……………?」

「御神……………どの?」

いつもの雰囲気じゃない少年に戸惑う少女達。

「ワオ、かっくいーねえ、隊長」

「……………お前にだけは呼ばれたくないな。そして、俺の質問に答えてもらおうか。どうして、お前はまだ生きている? どうして、張角と名乗ってこの世界にいやがるんだ!」

「アハハ!。そんな怒鳴らないでよ。後ろの子猫ちゃん達が脅えるじゃないか」

「……………いいから、答えろよ」

「もう、怖いな……………OK、話すよ。包み隠さず全てをぶちまけてね……………あつ、別に変な意味で言ったんじゃないからね」

「……………」

「アハハ、僕はあの時あの場所で確かに君に殺され死んだ。それは

間違いないよ……しかし、死んだのは肉体だけだったようだね。どうやら僕は天国にも地獄にも嫌われているらしく、魂だけがこの世界へ彷徨うことになったのさ」

「僕は荒野を彷徨い街を徘徊し、偶然にも僕と波長が合う身体を手にいれたんだ」

「それが、張角ってワケか？」

「ノンノン、それは違うよ」

アレンは人差し指を振る。

チツチツチ、と誰もが癪に障る仕草でだ。

「僕はここにはいない。遠くの方からコイツ自身の精神を支配しては黄巾党を操っているのさ」

「結局は張角もお前の操り人形だったってワケか……そこまでして何が目的なんだ？やはり戦争か？」

アレン「マクダエルの目的は『究極のゲーム』」

『究極の願い』とも置き換えられて、それは『神殺し』と呼ばれる。その悲願を達成するためにはいくつものプロセスが必要で、その中には『戦争』を起こすことが必須条件だとか。で、その為に現世ではいろいろ企んでは御神に二度ほど邪魔をされて、結局は戦争を起こすことはできなかった。

だから、今回もめげずに、諦めずに、しぶとく、しつこく戦争を起こそうとしての、この騒乱だと予想した少年だったが、

「うん。それもあるね。でも、それはついでだよ」

「……何だと？」

この騒乱は今回のアイツの目的にとつてのついでだと言う。

予想が外れ、少年は動揺を隠せないでいた。

御神の動揺に、困惑する表情に満足したのかアレンは告げた。

「コレは君への挨拶だ」

「あい、さつ……だど？」

「僕はねえ、負けず嫌いなんだ。やられたら何十倍にして返してやらないと気が済まないタイプでもあるんだよ」

「だから……お前はたった一人の人間を復讐するために、多くの人達を、罪の無い者までもを戦争に巻き込んだっていうのか!？」

「アハハ、リベンジって言ってくれるかな!そして、僕を敵に回したのが失敗だったね。アリスちゃんと共に僕の部下オモチャのままでしたらこんな悲劇は起きなかったのに。僕の邪魔さえしなければ沢山の罪無き者達が犠牲にならずに済んだのにねえ、御神リョーマ君」

「……」

コイツはそういう奴なのだ。

魔術師の中でも異例な存在。

否、魔術師や超能力者などの分類以前の問題だ。

自分以外の者達の不幸を望む最低な下衆野郎だ。

他人に降りかかる不幸を嘲笑うだけの存在。

『神殺し』然り、今回の『挨拶』然り、本当にどうでもいい事情で何万という人々を巻き込んだ救いようの無い最低のクズ野郎だ。

「僕は君がどこに逃げようが、そこが地獄の果てであろうとも追い掛けるよ」

ゾクリ、と少女達の背中に悪寒を走らせるに十分過ぎる言葉だった。

少女達は一言も言葉を発することができないほど、異質で異様で異常な敵だった。

「このストーリーカー野郎が……もうお喋りの時間は終わりだ」

「げっ……ソレはまた無意識にかい?君のご都合主義に付き合わされる僕の身にもなってよ……と言っても他人の体だからどうでもいい話なんだけどね。ソレを喰らっても僕は痛くも痒くもないよ」

「……」  
負の感情を全て募らせ爆発させたその力。

前回、その力でアレンを葬った。

だから、今回もと御神はフラストレーションを爆発させる。

巨大な影の手……否、ソレは悪魔の手と表現した方がいいのだろうか。

少女達が今までに見たことも感じたことない、禍々しい魔力を放ち巨大な手を振り上げた。

「それよりも早すぎやしないかい？僕はもつと君とお喋りしたかったよ」

「嫌というほど十分に喋った。そして、お前、というか張角を早く殺らないと死者が止まらないだろう？」

「アハハ、そうだね。うん、一思いにバツサリやつちゃってよ」  
両手を広げ、その攻撃を受け入れようとする張角。

抵抗の意思はなさそうだ。

「……抵抗もしないのか？お前は」

「うん。だって、僕とこのオッサンじゃ力半減だし、そもそも僕は聖人でもなければ悪魔の力も行使できない雑魚に成り下がった魔術師だ。今の君には敵わないよ」

「……あっそう」

本当にふざけた野郎だ、と悪態については悪魔の手を振り下ろす。ズパン、と縦に振り下ろされ、張角の身体を真っ二つに切り裂いた。

御神の一撃。

悪魔の一振り。

それに伴い生じる事象は二つ。

一つは張角の絶命。

もう一つは……

「これは……………っ!？」

「白蓮殿、今が好機ですぞ！」

「どうやら、そのようだな」

それは、黄巾党のゾンビ軍に苦戦していた連合軍にとっての吉報だ。

「と、止まった……………？」

「ま、まさか……………あ、愛紗ちゃんや御神さん達が？」

それは、張角が絶命したことによって黄巾党に掛けられていた術式が解除された事だ。

「ええ。たぶんそうです……………皆さん、あともうひと踏ん張りです。

頑張ってください！」

「皆、足元の死体に注意して突撃、なのだー！」

次々に死者は力なくその場に倒れていく。

一人、また一人と正気を取り戻す者達。

「春蘭さまっ!!!」



「ああ。やる時はやる奴なんだ、御神は」

戦意の残っている者はどれくらい居たのだろう。

「どうやら張角を討ったようね」

「ええ、そのようで」

「今が好機ね……秋蘭、最後の追い込みを掛けてちょうだい！」

「御意！」

殆どの者が術式から解放され、この状況を理解しては武器を手放す。

足元に転がるソレらを見れば一目瞭然だ。

戦意の失った者の方が多いのは当然のことだろう。

そして……

まもなくして、黄巾党の拠点にしていた城を制圧することに成功した。

御神の一撃で文字通り真っ二つになった肉塊。

肉塊にしたソレはもう、起き上がってくることはないだろう。

ただ、張角は絶命しても尚、アイツは喋りを続けていた。

「アハハ……やはりその力は凄いね。羨ましいや」

「……………」

「な、なんや！まだ声が聞こえとるで!？」

「う、そ……これでお終いじゃなかったの??」

「これが魔術師、なのか……?」

「何なのだ?こやつは一体……………」

肉塊からではなく空から聞こえる、と表現した方がいいだろう。

少女達は得体の知れない恐怖に襲われる。

先ほどまでの肉声とは違った声。

少女達はもちろん、御神でさえ動揺した。

何故なら、女性の綺麗な声だったからだ。

その声はアレンの喋り方とミスマツチしている。

最悪の一言でしか感想が出てこない。

「アハッ、置き土産に一つ良いことを教えてあげよう……今この身体、容姿は村雲優佳ちゃん似の女の子だ」

「な、ん……だと!？」

「誰や?ムラクモウカって……………」

むらくもゆうか  
村雲優佳。

学園都市、御神の通う高校の巨乳要員の一人ではあるがモブきや  
ら。

クラスは別で、体育の授業をしている少女(の胸)に、よく目を  
奪われがちと……まあ、御神の気になるあの子、だ。

「この子の名は翡翠。ひすい真名を僕の名と同じくあれん亜蓮……さて、君はそ  
んな可愛い女の子であるこの僕を殴ることができるかな?御神リョ  
ーマ君」

本当に最悪の一言しか出ない。

割とマジで洒落にならない。

もし、本当にアイツの言うとおり例の少女の姿だったら……  
少年は本気を出せるのだろうか。

怒りを爆発させれるのだろうか。

アイツを目の前にして、動きが鈍る可能性は大きい。  
たぶん、狙いはソレなのだろう。

アイツは雑魚にまで成り下がった魔術師だ。

聖人でもなければ悪魔の力を行使する者でもない、ただの雑魚。  
ただの雑魚だからこそ、御神を倒す手段の一つとして、その容姿  
を利用するつもりだろう。

ただ、告げただけの事実には動揺し、困惑し、恐怖してはアレンの  
術中にハマってしまったっている。

ただ、それだけの事に実際、効果は抜群だった。

一分一秒、今この瞬間にもアイツの精神攻撃が御神の心を締めつ  
けていく。

「アハハ、まあ今日のところはこれで引き上げようか。君の顔も見  
れたことだしね」

「……………くそつたれが」

「それじゃ、アディオス」

アレンの声は消え、辺りは元の静けさに戻っていった。

自分勝手に身勝手な敵に、結局は一部始終翻弄されっぱなしだっ  
た、と言わざるを得ない。

嵐は去った。

静寂さが空間を支配していく。

緊張が解けたのか御神は膝から崩れ落ちた。

「……隊長っ!?」「……」

「御神殿!」

「悪いな皆。怖い思いをさせてしまった」

「いえ、私達は大丈夫ですが、隊長の方こそ大丈夫ですか?身体が  
震えておりますが」

「……………え?」

言われて初めて気が付いた……………全身が震えていたことに。

少女達もアイツに恐怖したのは間違いないだろう。

だが、それ以上に自分がアイツに恐怖していた事に気が付いた。

「ははっ、何でだろう？昔の事を思い出したから、かな……………つて、お前らくつつくな。関羽さんが見ている手前、恥ずかしいだろうが」

震える少年を三人は抱きしめた。

「隊長は少し黙るとき！」

「あ、あの……………真桜さん？」

少女の強い口調に戸惑う御神。

「真桜ちゃんの言つとおりなのー。隊長は黙って私達の抱擁を受けてほしいのー」

「隊長。少しだけこうさせてください」

「……………うん」

少女達の言葉に甘え、少年はその抱擁を受け入れた。

「まあ、さっきの話はイマイチよう分からんかったけど……………隊長はずっとウチらの味方やんな？悪もんに戻ったりとかせえへんやんな？」

「……………ああ」

「だったら、隊長をイジめる奴は私達が許さないの。けちよんけちよんにしてやるのー！」

「隊長。我ら三人はどんな時でも貴方のお味方です。共に苦難を乗り越えていきましょう」

「ああ、そうだな……………ありがとうな、三人共」

もしかしたら御神が恐怖したのは少女達の拒絶だったかもしれない。

張角にトドメを差した一撃はお世辞に気持ちの良いものとは言い切れなかった。

その禍々しい魔力を宿した影の、悪魔の巨大な手は完全に少女達を恐怖させただろう。

だからこそ、コレを行使する自分を拒絶されることを恐れたのか

もしれない。

しかし、少女達は少年を拒絶することはなかった。

少年を安心させるため抱擁した。

それはとても暖かく、とても優しく少年の心を包みこむ。

（ふふ。残念ながら私が入るわけには行きませぬ……）

微笑ましい光景に微笑む少女。

そこから少し離れてたところで、関羽は少年達を暖かく見守るの  
であつた。

オマケ

御神「ありがとうな、皆。もう、震えは止まったよ」

真桜「なんや、もっと抱きついてたかったのに」

紗和「そうなのー。もっと隊長を感じてたかったの」

凧「……そうですね。とても、もの凄く残念です」

御神「それは全てが終わってからだ。そう拗ねるな」

関羽「その通りだぞ、お前達。まだ、黄巾党の殲滅は終わっていないのだ」

真桜「ちえ〜。二人して堅いな」

紗和「お堅い二人はぶ〜ぶ〜なの」

凧「……仕方ない。さつさと終わらせてまた隊長の温もりを……  
///」

真桜「あかん、凧が昇天したで！」

紗和「これじゃ、戦闘復帰できないのー！」

御神「なんてこった！それは一大事だな！」

真桜「せや、ウチも酷い目にあつたから戦闘復帰難しいわ。あ〜、  
なんか急に意識が朦朧と〜……」

御神「そんな喋れていたのに、急にか!？」

紗和「私も凧ちゃんと真桜ちゃん同様、無様にやられたから戦闘復帰は難しいかもなのー」

御神「……こいつら〜」

関羽「……………」

御神「関羽さん。俺達、御神隊はこの先も上手くやっていけるので  
しょうか？」

関羽「わ、私に聞かないでくださいっ！」

という感じで続きを書こうかなと思ったけど、作者の気分が優れないのでこっちに載せました  
本編も会話だけにしようかな  
めっちゃ楽だね

FF零式、二週目のプレイが終わって、やっと投稿できました  
最後のエンディングに涙した、感動した  
クオリテイ半端ねえ！！

でも、それ以上に不満がめっさある。積もっている  
特に最終章だけど、そこら辺はここで愚痴ることじゃないから割愛  
して……

まあ、最後に一言

もう、スクエニのゲーム、というかFFは買わない。言えるのは、  
ただそれだけ

卒業おめでとう、作者<sup>オレ</sup>orz

「リヨーマ、凧、紗和、真桜。それから関羽……よくぞ張角を討ってくれたわ」

「ん？ああ……」

黄巾党の制圧はほぼ完了し終えている城内にて、華琳達と合流した御神隊及び関羽隊。

少し元氣のない返事をされ訝しげにする華琳だったが、敵が敵だけにその異常性を考慮して納得した。

「俺は褒められた事は何もしてないさ……褒めるなら凧達をだな。張角相手に頑張ってくれた」

「あら、そうなの？」

「いえ、張角を討つたのは隊長ですし、我々はただ張角に成すがままでしたので……褒め称えるべきなのは隊長にあつて我々ではありません」

「いやいや、凧達がアイツの気を引き付けてくれたからこそ、周りの被害が最小限で済んだんだ。そこは誇るべきだ。謙遜するな」

「いえいえ、隊長こそ謙遜しなくて結構ですよ。貴方さまが駆けつけてくれなかったら我々は今頃……」

「いや、凧が……」

「いえ、隊長が……」

と、譲り合いの精神。

「まあ、賞賛すべきなのは両者ともにあるのだけどね」

「二人共頑固やな〜」

「二人共頑固なの〜」

(ふふ、本当にお仲が良いのですね)

そんな二人に少女達は微笑ましく見守っていた。

「お〜い、愛紗ちゃん」



ふと、遠くの方から声がした。

関羽は自分の真名を呼ばれ、声のした方に振り向くと劉備達が駆け足でやってきた。

「桃香さま、ご主人様。ご無事でなによりです」

「愛紗、ご苦労さま」

「いえ、私は……」

何もしていない、と言葉を繋ぐことができなかった。

実際に、敵の強襲に抗うことができず、他諸侯の重人にその命を助けてもらった。

敵の頭を目前に恐怖をしても何もできず、ただその場の雰囲気の流れされるだけだった。

その事実を伝えるのには躊躇い、情けない自分に嫌悪しては齒噛みした。

そんな自分に劉備達が心配して声を掛けてきたが、大丈夫と応え、それよりも、御神殿が皆に話しておかねばならないことがあるらしいのですが……」

「何なんだ一体？」

「はい。それは張角という人物の正体についてでございます」

「張角の正体？」

「今更、正体を知ったところで黄巾党がどうなる訳でもないんじゃないじゃあ」

「……」

普通なら今さら張角の正体を知ったところで何がどうなる、と不問に終わりだろう。

ただ、今回の騒動を起こした親玉が異常だということ。

あれほど強い御神という少年でさえ、自分達より恐怖しては震えていたこと。

それを考慮すると、張角の正体を蔑ろにするワケにもいかない。

まあ、実際にあの祭壇でのやり取りを聞いていなければ、こういう思考にはならないだろう。

「それはどういう意味かしら？ 関羽」

華琳も敵の異常性に気付いていたのだろう。

もしくは興味本意かもしれないが……

「はい。あの者の正体は御神殿の知人だということらしいのですが

……」

「リョーマと張角に繋がりが……どういう事よそれ？」

「それは御神殿がご自身から話してくれるそうです……御神殿、そろそろいいですか？」

「ん？ ああ、分かった。話すよ……でも、全員が集まってからだ」

少しの刻が経ち、夕暮れに空が染め上げられる頃合。

春蘭、季衣、秋蘭、桂花、公孫賛、趙雲、諸葛亮、張飛が各々の作業を終え、集まった。

春蘭の熱い抱擁（暴力）、季衣との犯罪一歩手前のスキンシップ、秋蘭の嫉妬、桂花の危険な思想、公孫賛の存在の薄さ、趙雲の妖艶な笑み、諸葛亮のはわわ、張飛の手に持っていたこんがり焼けた豚の丸焼きは愛用の豚疑惑、などの描写は割愛で。

「アイツが生きてやがった」

「……アイツというのは張角の事でいいかしら？」

「正確には張角の精神を乗っ取った他の人物。それがアイツだ」

「……貴方の言う、人心掌握みたいなものでかしら？」

「まあ、みたいなもので……そして、アイツは俺や恋人の人生を狂わせた張本人、ってことらしい」

「こら。『らしい』って何で付けるのよ？」

「それは俺が記憶喪失で恋人やアイツから聞いた話だからな」

「もう、訳がわからないわ……ちゃんと、私達に理解できるように説明なさい」

「ああ、そのつもりさ」

自分はアイツの部下オモチャだった、らしいこと。

自分は名も知らないその魔術結社の一員として学園都市に送り込まれたスパイだった、らしい。

らしい、というのは不慮の事故か何かで記憶喪失になったからだ。何が原因で記憶喪失になったかはアイツ以外知らない……

「他国のスパイなんて任務も恋人であるアリスのことも忘れてしまった……そこで、友人や後輩ができてはアリスの想いなんてモノに気付かず……まあ、記憶喪失になってアリスと初めて会った際にはポコポコにされては病院送りだった」

「マジかよ……」

「マジだよ、北郷くん」

久しぶりに会った恋人に他人のフリをされてキレた少女。

沸点の低いDSな彼女は少年がシラを切り続けることに腹を立て、病院送りしましたとき。

まあ、その後日にまたアリスと一悶着があつたが無事に和解しては今まで通り恋人の関係で今も絶賛継続中だ。

「和解してからアリスと過ごした時は一ヶ月にも満たないのが残念だな……」

「……」

「まあ、ここでは俺が危険な組織の一員で、でも記憶喪失者で正義の味方になったと簡単に踏まえていくれたらいい」

で、ここからが本題ですよ、と話を続けた。

アリスと和解してから数日後、とある事件が発生した。

アイツが動き出したのだ。

他の魔術師が企んだ計画に便乗しては、自分を人質アリスにしては恋人に命令した。

学園都市に住む230万人を絶望のどん底に落とせ、と……否、230万人の命運だけじゃない。全人類を巻き込もうとしたのは確

かだった。

それがアイツの第一目的である『戦争』なのだが今は置いて。自分はそれを阻止するべく友人と共に暴走した恋人と闘った。

なんとか敵の計画もろとも阻止したのはいいが、それをきっかけにアイツが追い討ちをかけてきた。

10万3000冊の魔導書を所持する一人の少女の争奪戦が起きたことだ。

「あの時、俺はこの手でアイツを殺した。間違いなく確実にアイツの身体は燃えて灰になったはずだった……でも、アイツは生きていた。他人の身体を乗っ取って、翡翠ひびすいという者に化けて生きていやがったんだ。俺を復讐するためにな」

「……隊長」

「兄ちゃん……」

「……リヨーマ」

拳からまた血が流れている。

また、身体が震えていた。

「アイツは言っていたよ。この騒動は俺への『挨拶』だとな」

他者を操り、黄巾党を操り ただ一人、復讐するために全力をぶつける。

自身の都合、我が侷、欲求によって犠牲になった者達のことなど気にしない……それがアイツである。

「だから、みんな……俺のせいでもた騒動に巻き込んでしまつかもしれない。本当にごめん」

アイツがまた事件を、騒動を起こそうとしている。

それは少女達にも降りかかる火の粉。

火の粉なんて可愛いものじゃないが、その厄災は完全に少女達にも牙を向けるだろう。

自分といれば今回の騒動と同じく理不尽に不条理に彼女達を巻き

込んでしまつ。

そう告げて謝るが……

「何故、貴様が謝る？」

春蘭がそう訊ねた。

「いや、何故つて、この騒動を引き起こした原因は俺にあるから……」

「いやいや、それはおかしいつて。その話が本当だとしても、お前が謝る要素なんてこれっぽっちも無いぞ」

「そうですぞ、御神殿。殺した相手が違う世界で生きていただなんて誰も予想などできません」

「そもそも、悪いの全部その翡翠つて奴が悪いのдар？お前は悪の大魔王の魔の手から世界を救つたんだろ？」

「そうだよ。兄ちゃんは凄いことをしたんだよ」

「そうです。隊長が悪いワケありません」

隊長が悪いワケないやん、と真桜たちもそう応える。

少年はそれを聞いては、言葉を詰まらせた。

「え〜と、確かに全てにおいて悪いのはアイツなんだけど……そうじゃなくて、その……あ〜、何て言えばいいのかな……」

言い方を間違えたのか……

御神は自分が言いたいこと、謝りたいことを上手く伝えられずに、頭をガシガシ？く。

「ふふ、相当困惑しているようだな。御神」

「あんた、言いたいことがあるんだつたらはつきり言いなさいよ」

「御神さん、頑張つて！」

「お兄ちゃん、がんばれなのだ！」

「だから……そう、これからもこういつた騒動に巻き込んでしまつからごめんつて……」

「隊長。さつきと似たようなこと言つてるよー」

「うぐ……」

「そうね。リヨーマ、貴方の口から聞きたいのは謝罪の言葉じゃな

いわ」

「……………」

少年の手に小さな手が添えられた。

その手を見て、その手の持ち主の顔を見ては周りを見渡した。

少女達の顔を見て少女達は何を言っているのかも理解した。

少女達が少年に期待していたのは謝罪の言葉などではない。

それは、先ほど祭壇で三人の少女達と誓い合ったばかりのはずだ

……

「俺はアイツを倒す。どんな手を使っても、それが卑怯だと言われようともアイツを殺す……だから、俺に力を貸してくれ。俺と苦難を乗り越えようではないか、妹達よ！」

「……………」

言うておくが御神はガチでマジで本気で真剣だ。

真剣なら、『妹』というワードが出てくるはずがないのだが……

日頃から『妹』『妹』と連呼していたのが仇になったか。

無意識に少年は言葉に出してしまったのだらう。

「……………やっぱり謝れよ。お前」

「何故にっ!？」

皆を代表して北郷一刀がそう告げた。

御神が真剣だったのも理解しているのだらうけど……

最悪だ。この居た堪れない雰囲気はどうしてくれようか。

少しの静寂という名の沈黙が空間を支配した。

「ま、まあ、今日はこれで良しとしようかしら」

顔を引きつらせた華琳にしては珍しく、少年に対してお咎めは無しだった。

ただ、曹・劉・公連合軍が解散するまでの間、少女達の風当たり

が強かった。

洛陽の街に一人の少女がいた。

名は翡翠<sup>ひすい</sup>、真名は亜蓮<sup>あれん</sup>。

この世界の巨乳要因の一人で、十人いれば十人とも振り向く美少女。

洛陽の街を治める董卓に仕える将で、現在は街を警邏している最中だったりする。

「アハハ、ホント君を観ていると飽きないから良いよね」

少女は後ろにいるお供の兵達、行き交う民達の間も気にすることなく笑う。

誰一人として、少女が何を言っているのか理解できない。

誰のことを差し、何故にそのような獲物を狙う獣の目をしているのか理解できなかった。

「いやん、どうしよう。この高ぶった気持ちは何？……もしかして、

恋！？ねえ、これって恋でいいのかな？？」

「いや、私どもに訊かれましても……そういうものはご自身が一番判るものでは？」

「まあ、そうかもしれないけど、恋なんてしたことないから分らないんだよ。もしかしたら、破壊衝動かもしれないしね。」

「ぶ、物騒な事は言わないでくださいよ」

「アハハ、冗談だよ冗談」

頭の中で思い浮かべた者とその周辺を覗くことができる力が彼女にはあった。

それは『観察』という魔術。

七つの大罪、『怠惰』を司るベルフェゴールに関するエピソード『幸せな結婚』の逸話から作られた術式。

現世で『怠惰』ベルフェゴールの魔術的記号要素が含まれた身体は焼失したはずにも関わらず、ただの魔術師に成り下がったのにも関わらず『観察』を行使した。

聖人の力も無く、悪魔の力『影』シヤトルも行使できないにも関わらず、この力だけは失うことはなかった。

少女はその力を行使しては御神達の様子を観ていた。

張角の死後に、術式を掛けてからずっとだ。

空から御神達に声を放つたのもこの『観察』があつての応用だ。

「何や、えらいご機嫌やんか、あれん亜蓮」

「おっ、やっぱり分かっちゃう？しあ霞ちゃん」

声を掛けられ足を止めた前方には、えらく派手な格好をした少女が立っていた。

名は張遼。真名は霞と董卓に仕える将の一人で関西弁を喋る亜蓮の戦友だ。

「キモイぐらいニヤけてどうしてん？兵士達がドン引きしてるで」「彼等が僕をどう見るかは自由だよ。それよりキモイって、ホント容赦ないな君は……ああ、実は旧友に偶然会っちゃってね。思いのほか会話が弾んじゃったんだ」



「ふん、よかったやん……にしても、そのニヤケぶりからして相手は男なんか？」

「えへへ、そだよ」

「やったんかいな？ん？」

「いや、何でエロの話になるのかな？……あー、でも。そうだね、今度会った時は……」

前世は男。というか、今も中身は男だ。

やはり、いくら相手が『男の娘』でも抵抗がある。

しかし、自分と少年の関係を考えた上で、そういう想像をしては笑う。

その美貌も醜悪な表情へと変貌するがお構い無しだ。

「ヤっちゃうのも、それはそれでアリかもね。アハ、アハハッ、アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ」

「おーい、亜蓮。せっかくの美人さんが台無しやで」

この街のこの光景は日常茶飯事だ。

ただ、見慣れていても悲鳴を漏らす者はいる。

見慣れている光景だからって刺激が強すぎだ。

子供を家の中に避難させる親さえいたことをここに記する。

すみません

ふざけてしまいました

シリアスなシーンが……ああああああorz

御神とアイツとの関係がちゃんと説明できていない気がする

アイツが何者なのか、どれほど異常なのかも説明できていない気がする

もう、作者自身もよく分からないです

いつか、修正します

きつと、修正します

黄巾党編はこれにて終了

次話からちよつとした日常パートです

それでは、さようなら

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4613x/>

---

とある恋姫の暴走人影（シャドウランナウエー）

2011年11月28日08時47分発行